
星屑明星～テイルズオブヴェスペリア～

月詠輝夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星屑明星〜テイルズオブヴェスペリア〜

【Nコード】

N8485Y

【作者名】

月詠輝夜

【あらすじ】

『僕はユーリのためならなんだって出来るよ』

大切なもののためならこの身を捧げることを厭わない、
帝国騎士団皇帝守護役の少女。

『ふたりに手エ出してみなよ。その時は僕があんたを殺してあげるからさあ！』

どんな敵が現れても絶対に守るんだ、
そう自分に言い聞かせてまっすぐ突き進む。
決して揺るがないその想いを胸に、後戻りはしないと誓った。

テイルズオブヴェスペリア二次創作小説。
自営サイトと重複投稿です。

オリキャラが登場致します。

傾向はユーリ寄り恋愛ギャグシリアス。

オリキャラ設定は濃いです。

チャットです <http://ncode.syosetu.com/n2879z/>

設定（前書き）

かなり濃いです
ネタバレ有

根は素朴でかなり傷つきやすい人
好きなものには一途で諦めが悪い
スマートな雰囲気を持ち主です
心の中はけっこうロマンチック
何年経っても夢を忘れない人

容姿

容姿端麗 中性的

どちらかという美人

薄い碧の髪は長く、腰辺りまである

髪は軽いウェーブがかかっている

左目は翡翠、右目は金色

金色の瞳の方は眼帯を着用

武醒魔導器は両手首にある

腰には武器の双銃ホルダー

備考

平凡(?)な貴族(公爵家)に生まれたが、瞳の色が違ったために疎まれていた。

ほぼ毎日下町で暮らしていた為、ユーリとフレンと育ったようなもの。

ほんの少しだけクリティア族の血が混ざっており、ナギーグが使える。

しかし武醒魔導器を使用している。

魔導器は自分でユーリとお揃いがいいと無理にお願いして改造した。守護役という地位は騎士団長より上。

しかし実力はそれより下。

エステルに推薦され守護役になったために騎士団長よりは上らしい。満月の子の力と相反する力を持っている為、彼女の治癒術は効かな

い。故に逆も然り。

満月の子と相反するものの事を新月の子と呼ぶ。

それを知ったのはフェローと直接話をしに行ったとき。

小さな頃から迫害されてきたため、その力を無意識に封じ込めていた。

実は身体が成長するにつれ段々と漏れはじめていた。

新月の子はエアルを自分の体のように自由自在に操ることが出来、エアルをマナに作り変えられる。

エステル同様精霊の声が聞こえる。

さらに召還することが出来る。

『だよ』など、語尾を癖があり、ユーリ曰くそれがふざけてるように見えるらしい。

甘えたがりで抱き着き癖がある。

貴族街から出て下町に来た時に助けられたユーリに一目惚れし、ずっとアタックしている。

フレンとは親友であり部下である。

ユーリにアタックしまくっておりいつも軽くあしらわれるが実はユーリも気があるご様子。

フレンもセアヴィラに気があるみたいだが彼女はユーリに一途。

運動神経は抜群なのだが、唯一水が怖くて水泳（泳ぐこと）が出来ない。

視力は両目共に2.0以上ある。

ユーリにしつこく付きまとう。

普段はかなりの温厚な性格だが、時にかなり冷徹になるときもある。ラピードにはなつかれている。

いつもへらへらとしていて、怒ってる時も怒っているのか分からない。

戦闘は銃自体が魔導器になっており、エアルを溜め込んで発泡する。

エアルさえあれば無限に出続ける弾。

それが魔法になったりもする。

背が高いのがコンプレックス。
結構暑さや寒さにはかなり強い。
疲れや痛み鈍感な方で倒れるまで無理をすることが間々ある。
ジユデイスを慕って？ジユデイ姐？と呼ぶ。
最初は守護役であるため？エステリーゼ様？と呼んでいたのが次第に？エステル？となる。
レイヴンの事は最初から分かっていたのだが見て見ぬ振り知らん振り。
その為気軽に？おっさん？と呼ぶ。

- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -

好き：ユーリ、甘いもの、武器、夜空、花、踊り、凜々の明星、運動、ふわふわしたもの

嫌い：自分の考え（思い）に反する敵、帝国、水、騎士団、苦いもの、刀、雷

お相手：ユーリ・ローウェル

Voice：斉賀みつき

Song：鐘を鳴らして / BONNIE PINK

以下夢繪

> i 3 5 7 6 2 | 4 0 6 1
<

戻る

戦闘ボイス

戦闘開始時

「団体」

『とつととちやっちやと行きますか!』

『んじゃいくよ』

『いきまーす!』

「味方<敵」

『うっわ〜…最悪だね』

「味方>敵」

『お、楽勝楽勝』

『うん、楽できそう』

「強敵」

『ちよつと不安…』

『大丈夫、だよね…?』

「瀕死」

『ちよ、ちよつと休憩させて!』

『ヤ、ヤバインじゃないかな…』

「サプライズエンカウント」

『うっわ!!?後ろから!!!?』

『いきなりはやめてよね…!!』

「アドバンテージエンカウント」

『先制攻撃、行つくよ!!』

『おっ?これチャンスだよ』

戦闘中

「通常攻撃」

『ほっ』 『よっ』 『はっ』

『やっ』 『はあっ』 『食らえ』

「術技」

『これでも食らえ』 (攻撃術)

『おい、大丈夫?』 (回復術)

『援護しまーす』 (補助術)

『あつ弱点発見』 (弱点)

『ちえ、これじゃないか』 (耐性)

『お、こんなのどうか』 (新技発動)

「ダメージ」

『痛い！』 『うわっ』 『あだっ』

『いったあ！』 (クリティカル)

『ちよっと危ない…？』 (ピンチ)

『うえ〜ヤバイんじゃない？』 (全滅寸前)

「ガード」

『全然！』

『甘いなあ〜』

「ブレイク」

『うわっ！』

『やっぱ…！？』

「戦闘不能」

『ユーリの…愛が足りない…』

『…不覚だったね〜…』

「仲間が戦闘不能」

『ふうん、覚悟はいい？』

『もう許せないな〜』

『あは、殺しちゃうよ〜？』

「回復」

『平気〜？』

『回復だよ〜』

「戦闘不能回復」

『よし、いくよ!〜!』

『今度こそ…!〜!』

「敵を倒す」

『次はどいつ?』

『やったね!〜!』

『よしっ』

「アイテム使用」

『使うよ〜』 (オート使用予告)

『よっ』 (自分に使用)

『はいはい』 (仲間を使用)

『やっばいいいっ』

(アイテム使用中)

「逃走」

『あはは〜ばいばい』

「挑発」

『僕に勝てると思ってる?』

『ばーかばーか!〜!』

「オーバリーミッツ」
『僕、本気出しちゃっつよ〜?』

「警告」

『詠唱中だつてば!』
『敵の詠唱の邪魔してよ!』
『あははーヤバイかも』
『援護頼むね〜』

「バーストアーツ発動時」
『んじゃ、いつくよ〜!』

「秘奥義発動時」

『僕の本気の技、喰らってみなよ!』
『痛い目、見てみる?』

+

『光の如く切り刻み、刹那に輝く旋律の戒めの刻印を示せ』
『闇に蠢く魂よ、聖なる刻印の元、その悪しき心を貫け』

+

『これで終わり!』
『口ほどにもないね〜』

「勝利」

>ポーズ<

「A」銃を回してホルダーに仕舞う
「B」くるっと回る
「C」髪の毛を払う
「D」銃を空中に回し投げ、キャッチ
「E」服の埃を払う
「F」銃を回して前方に突き出す

「通常」

『よし、終わり〜』「A」
『…バーン！なんてね』「F」
『いーかんじ〜』「B」
『ふう、終わった〜』「C」
『んじゃ次、いってみよつか！』「A」
『僕の勝ちだね〜』「C」

「楽勝」

『らつくしよ〜』「B」
『□程にもないね〜』「F」
『楽勝すぎでしょ』「D」
『まだまだ行けるね！』「A」
『相手、間違えたね』「C」
『あはは、楽勝〜』「B」

「辛勝」

『お疲れさま〜』「E」
『ちよっとヤバかった？』「C」

『あつぶなあ…』「F」
『ギリギリってとこかな』「A」
『油断しちゃダメだね』「B」
『うーん：微妙だなあ』「E」

「秘奥義」

『僕の実力、思い知った？』「C」
『このまま行っちゃうよ！』「D」
『これは誰かを守る力…』「F」
『よっし、いい感じ』「C」
『決まった？決まった〜！』「A」
『僕って最強だよね〜』「B」

「対人戦」

『情なんてかけないからね』「D」

「スキルマスター」

『うん、いい感じだね！』「B」
『次、行ってみよ〜！』「F」
『また強くなっちゃった』「A」

「レベルアップ」

『己をさらに磨け、ってね〜』「A」
『僕はまだまだ強くなりたい』「C」
『誰かを守る力が欲しいよ』「E」

称号

称号

随時更新

* 帝国騎士団護衛役「初期称号」

騎士団長よりも地位の高い役得。大切な姫君を、親友を護衛するのが僕の役目です。

* 一途な乙女心

恩人のユーリが大好きで大好きで仕方ないご様子。その他の男には目もくれないのだ。

* 闇夜の暗殺者

僕が君の罪を背負おう。君が辛くないように。∴僕は、君のために。

* 公爵家ご令嬢

公爵家に生まれたが、片方が金の瞳の所為で疎まれ、虐げられ、生きてきた。

* ポジティブっ子

！。 どんなことがあっても明るく元気に。パーティーのムードメーカー

* 始祖の隸長の姫君

新月の子と言われる彼女は始祖の隸長の姫と崇められる存在、らしい。

* 乱れ舞う戦場の姫君

ひらり、ひらり、と舞いながら双銃を撃ち、戦場を駆け抜ける姿はまるで舞姫のよう。

* 魅惑の姫君「コス：ドレス」

ふんわりとまるでお姫様のような格好。僕にこんな似合っと思ってるの！？

* 自己犠牲者

誰かのために自分を犠牲にするのは自分自身が決めたこと。なのにどうしてか迷ってしまう。

* 純白天使「コス：天使」

聖夜にプレゼントを運ぶのはサンタだけではない。天使が運ぶ優しき贈り物。

*何でも料理人

庶民のものから高級なものまで何でもお任せ！ある意味料理は趣味ですから。

*大胆誘惑レディ「コス：タオル一枚」

お仕事中でもお構い無し！大好きなあなたをタオル一枚で誘惑しちゃう〜VVVV

*魅惑の花の精「コス：水着」

桃色の際どい水着は大好きな彼を誘惑するために…？

術技

「術」

攻撃技は全て銃から魔法を放つ

ファイアボール
ゆらめく焰

アイシクルレイン
氷の刃よ 降り注げ

イラプション
燃え盛れ 赤き猛威よ

ウインドカッター
切り刻め

エアスラスト
風よ 刃の如く切り刻め

プリズムソード
断罪の剣よ 七光の輝きを持ちて降り注げ

ロックブレイク
狂乱せし 地霊の宴よ

グランドダツシャー
大地の咆哮 それは怒れる地竜の双牙

ライトニング
雷よ 降り注げ

ホーリーランス
光よ 邪悪を滅ぼす槍と化せ

イラプション
火焰の帝王、地の底より舞い戻れ

スプレッドゼロ
たゆたう闇の微笑

スプラッシュ
汚れなき汝の清浄を彼の者に与えん

アクアレイザー
蒼き命をたたえし母よ、破断し清冽なる産声をあげよ

フォースフィールド
絢爛たる光よ、干戈を和らぐ壁となれ

サンダーブレード
雷雲よ 我が刃となりて 敵を貫け

インディグネーション

天光満つる所に我はあり

黄泉の門ひらく所に汝あり 出でよ 神の雷

ファーストエイド

優しき癒しの光よ

ヒーリングフォース

再生の力よ 宿れ

ヒールストリーム

優しき癒しの地よ

リザレクション

万物に宿りし生命の息吹を此処に

フィールドバリアー

彼の者たちにさらなる守りを

シャープネス

刃にさらなる力を

アグリゲットシャープ

彼の者たちに強靱なる力を

エスプレイドレイズ

すべての変動を打ち消せ

ジャツジメント

輝く御名のもと 地を這う穢れし魂に裁きの光を雨と降らせん

安息に眠れ 罪深き者よ

グランドクロス

霊冥へと導く破邪の煌めきよ 我が声に耳を傾けたまえ 聖なる
祈り 永久に紡がれん 光りあれ

サクリファイス・ジャツジメント

—「秘奥義」

—光の如く切り刻み、刹那に輝く旋律の戒めの刻印を示せ
天から何億もの光の雨を降らせ、地に十字架を刻む

「技」

フレアショット

連発で左右の銃から交互に連射し、爆発の勢いで相手を奥へ押し
やる

アクアバレット

両手をクロスさせ、双銃から同時に弾を打ち出す

スカーレット

左へ移動しながら連射で攻撃

ミステイアーク

双銃で地面に向けて放射状に掃射する

テイルトビート

敵の足下に弾を打ち込んで爆発させ、高く浮いたところを連射で
追撃

レールアロール

後方に跳んで距離をあけつつ、光線を連射して敵を撃つ

ガトリングバレット

宙に舞い、回転しながら十二発の弾を撃ち込む

シャイニングレーザー

交差させた銃口から光弾を撃ち出す秘技

クロスミラージュ

双銃から同時に銃弾を発射し、敵にヒットするとエネルギーが拡
散し、周囲の敵を巻き込んでダメージを与える

クラックビースト

獰猛な獣のごとき銃弾を二発同時に発射する

オールザウェイ

前方に氷の弾丸を乱射

ツインバレット

バックステップして拳銃を放つ

パワーショット

一発に高い攻撃力を込めて発射する

バーストショット

瞬時に空中に飛び上がり、回転しながら敵に攻撃する

バスターショット

無属性の弾を敵に撃ち込む

シューティング・ヴェスペリア「秘奥義」

闇に蠢く魂よ、聖なる刻印の元、その悪しき心を買け

双銃から全ての属性の銃弾を天に向かって打ち上げる。直後、ま

るで星のような無限の数の銃弾が降り注ぐ。

00 少女と月夜の出会い

世界は

どうしてこうも

醜いんだろうか

帝都ザーフィアス。彼女はそこの貴族街で育った。けれど双方の瞳の色が違うと言うだけで疎まれ、虐げられ、生きてきた。まだ十にも満たない彼女にはその環境は地獄でしかなかった。そんなある日、少女は決意した。ここを出てやるんだ、と。今まで家から出たことの無い彼女にとって外とは未知の世界だった。

家族や使用人が寝静まった頃、少女はこっそりと自室の窓から抜け出した。しかし外に出たことの無い彼女は貴族街の出入口に門番がいることも知らず、そのまま貴族街の外に出てしまったのだ。

「貴女はセレーネ様のご息女のこと……!」

『!』

「あっ、待ちなさい!」

気付かれた門番から逃げるように走る。裸足で出てきてしまったので、結構足が痛い。けどあそこには戻りたくない。いたくない。だから我慢して逃げるしかなかった。

しかしどうも街の中は複雑で、どこに行けばいいのか分からず途方に暮れていた。その時、ふとある坂が目に入る。かなりの傾斜の坂だったが、もしかしたら下に、外に繋がっているのではないかと思った。行くか行くまいか迷っていたが、後から近づく鎧の音に、ビクリ、と身体が跳ね、自然と足はその坂を下っていた。

「お待ち下さい……!」

『…っ!』

いつの間に連絡が行ったのか、下の坂からも追っ手が迫っていた。前を見ても後ろを見ても逃げ道はない。ああ、またあの孤独で寂しい部屋に戻されるんだ。そう思ったとき、突然坂の下の方の騎士が倒れた。きよとん、としていると、誰かに手を引かれる。暗くて？誰か？の顔は見えなかった。

「来い！！」

『わ…っ！！』

ぐいつ、と引つ張られ、慌てて体勢を立て直す。彼女はされるがままについていく。暗くて辺りなんてうつすらとしか見えないはずなのに、複雑な道をすいすいと進む。そしてあっさりと追っ手を撒き、足が止まった頃には息が切れていた。見ればここはどこかの部屋だった。

「ふう。大丈夫か？」

『え、あ……っ』

部屋に月明かりが差し込む。するとここまで引つ張ってきてくれた人物の姿が目に入る。それは女の自分から見ても綺麗だと思える容

姿だった。

黒く長い髪に整った顔。そんな彼に思わず顔が紅くなる。彼女は彼に一目惚れをした。しかし次の瞬間、彼の目が見開かれる。少女はハツとし、自分の左目を繋がれていない片手で押さえた。

「お前…その目…」

『……見ないで』

「！……俺は綺麗だと思うな。月みたいな金色の瞳」

その言葉に少女は驚いたように立ち尽くす。そんな事を言われたのは初めてで、思わず彼に見とれていた。すると彼は目を隠していた少女の手をそつと外す。それで現実に戻った彼女は、ふいつ、と顔を反らした。

「お前、なんで追いかけてたんだ？」

『……』

「つと、その前に自己紹介だったか。俺はユーリ・ローウェル。お前は？」

『…僕は、セアヴィラ…。セアヴィラ・ディアナ・セレーネ…』

彼女、セアヴィラが名乗ると再び、ユーリと名乗った少年の目が見開かれる。それに気付いた彼女は慌てて口を塞いだ。

セレーネといえば帝都でも名の知れる大貴族、公爵家なのだ。もしかしたら騎士団に連れて行かれるかもしれない。そう思うと勝手に身体が動いて逃げ出していた。しかし未だに手を繋いでいたセアヴィラは難なく彼に引き留められ、ベッドへと押し倒される。

『っ！っ！』

「落ち着け。大丈夫だ。通報なんかしやしねえよ」

『え…っ？』

「何か理由があるんだろ？話してみろよ」

彼に真っ直ぐ見つめられ、ドキッ、としながらも、こくこくと頷いた。

それからセアヴィラは今までのことを全て話した。その間、ユ
ーリは黙ってそれを聞いていてくれた。

『…だから、追いかけてたんだ』

「…そうだったのか」

『あのっ、…さっきは、ありがとう…助けてくれて…っ』

「いや、気にすんな。それよりお前、これからどうするつもりだ？」

ユーリに聞かれ、きよんとする。確かに家を出ても行くところがない。結界の外に出れば魔物もいると聞く。しかしこのまま戻るわけにはいかない。

どうしようかと迷っていると、彼がセアヴィラの頭に手を乗せる。

「行くところねーんなら暫くここにいろ」

『…！…いいの？』

「ああ」

『っユーリ大好き!』

「!?!?ちよ、?セアラ?!」

かばっ、と彼女はユーリに抱き着くと聞きなれない言葉を耳にする。首を傾げてそれを何度も繰り返して呟いていると、彼は笑う。

「セアラ。セアヴィラなんて長ったらしいし、そう呼ぶぜ?」

『!?!うん…うん、ユーリ!』

彼女は嬉しくなつてまたユーリに抱き着く。そんなセアヴィラに彼は頬を微かに染めた。

「ユーリ、さっきから煩いんだけど…」

「フレン!」

そんな中、誰かがユーリの部屋に入ってきた。

フレンと呼ばれた少年はセアラを見て言葉を失う。未だ抱き合っている二人は何故彼がそんなにも目を見開いてるのか分からず首を傾げていた。

『誰？』

「ああ、俺の幼馴染み。フレンっつーんだ」

『へえ…で、なんでフレンは固まってんの？』

セアヴィラとユーリはそのままの状態で話しを続ける。彼女が自然とフレンの名前を呼ぶと、彼はやっと我に戻った。

「な、何でもないよ…（み、見とれてたなんて口が裂けても言えない…）」

『ふうん…僕はセアヴィラ・ディアナ・セレーネ。よろしくねフレン』

「セレーネ…！？」

フレンの驚きようにセアヴィラは、またやっちゃった、と眉を潜めてユーリに視線をやる。

「大丈夫だ。な、フレン」

「なっ何が大丈夫なんだ！セレーネと言えば…」

「はいはいちゃんと事情は話すから取り敢えず落ち着けて」

宥めるようにユーリが言うと、さっきの慌てようが嘘のように、彼は押し黙った。そしてユーリは事のあらましを全て話す。するとフレンも納得してくれたようでセアヴィラはほっと胸を撫でる。

「そう言っことなら僕もここに置いてあげるのには賛成だよ」

『ありがとう…！』

「…！」

セアヴィラは嬉しそうに満面の笑みを浮かべる。それはとても綺麗で、二人は暫く彼女の笑みに見惚れていた。

「じゃ、じゃあ女将さんに頼んで一部屋貸してもらおう…」

『僕、ユーリと同じ部屋がいいっ』

フレンの言葉を遮り、セアヴィラはユーリに抱き着き直しながら言う。

「え！？ちょ、それは…」

「俺は別にいいけどな」

焦るフレンとは裏腹に、ユーリは心なしか嬉しそうに呟く。それに落ち込んだ彼に、セアヴィラは悪気もなしに笑顔になった。

『あ、なんかお手伝いすることがあったら言ってね！』

「まあ手伝うのはいいけど、外に出るなら騎士団に見つからない程度にしとけよ？」

『分かってるよ〜』

先程会ったばかりだと言うのにこんなにも馴染めるのはきつとユーリのお陰なのだろう。こころやって同じ子供と接することの無かった彼女に初めての友達が出来た瞬間だった。

… 数年後。

街の結界の外。そこに、腰に二丁の拳銃を携え、長く綺麗な緑の髪を風に靡かせている女性が立っていた。

『…ザーフィアス』

彼女は目の前に聳え立つ帝都を見上げた。

『っ任務完了〜 やあっと帰って来たよ〜！エステリーゼさまへの土産話も持ってきたし… あ、先にユーリに会いに行かなくっちゃユーリ〜待っててね〜！』

彼女は周りにハートを撒き散らし、桃色のオーラを醸し出しながら帝都の下町への門を潜った。

『ユーリっユーリっ』

端から見れば可笑しいと見られる彼女だったが、いつも下町の住人はそれを微笑ましく見る。しかし途中でその歌は途切れた。いつもの下町とは何かが違う。目の色を変えた彼女は駆け足で下町の坂を上る。

すると広場の噴水が暴走しているのが目に入った。その周りには下町のみんなが懸命にそれを止めようと作業をしている。

『何、これ…』

ふと噴水の中心に目をやると、そこにあるはずのコアが無くなっていたのだ。状況が分からない彼女は馴染みあるハンクスの元へ駆け寄った。

『ハンクスじっちゃん！この騒ぎ、一体なんなの！？』

ないと気が済まないな』

爽やかな（黒い）笑顔を浮かべてセアヴィラは帝都の広場へ続く坂道を上っていった。

月夜の出会い

（運命の出会い、なーんてねっ）

00 少女と月夜の出会い（後書き）

夢主はユーリ大好き、ユーリ依存症な、ヤンデレっ子です（＾o＾）
)

01 暗殺者と癒えない傷

僕は大好きな人も

大切な親友も

守りたい

例え自己犠牲と言われても

彼女、セアヴィラは貴族街の入口に立っていた。そこには門番が二人倒れており、近くには少し大きめの小石が落ちていた。そしてその奥では何やら騒ぎになっているようだ。彼女が一步踏み出したその時、逃げるように馬車がこちらに向かってきた。

『う、わっ！！？』

突然のことに、避けられないと思ったセアヴィラは真上に飛び上がり、通り過ぎる馬車の屋根に手を付いて飛び越えた。上手く着地した彼女は去っていく馬車を振り返る。

『あつぶないなあもう!』

「こりゃ馬車はもう無理だな」

『!! ユーリィVV』

叫ぶと同時にユーリの声が聞こえてき、彼女は馬車のことなんて直ぐに忘れて前を振り返る。そして急いで声が聞こえた方へと歩を進めた。

『ユー…!』

しかし同時に嫌な人物が目に入り、浮かれた気分はどこかへ行く。

『キユモール…』

「おや、セレーネ嬢。お帰りになられていたんですね。丁度良い。あなたも手伝って下さい。あそこのユーリ・ローウエルを捕まえるのを」

キユモールは今は空き家の貴族宅の前で騎士たちに囲まれて蹴ったり殴られたりしているユーリを指差す。彼女は燕尾服のような服の裾を翻し、彼らの方へと歩いていった。

『あ〜ん〜た〜ら〜!!』

「!!」

『僕のユーリに何してんだあああああ!!』

ダダダダダ!

セアヴィラは腰のホルダーから双銃を取り出し、それをユーリに当たらないように騎士たちに連射した。

「ああそうだったよセレーネ嬢はユーリ・ローウェルに心底お熱だったね」

キユモールはそんな彼女を呆れたような目で見ていた。

『僕のユーリを傷物にしてただで済むと思っただけじゃないよね!?!』

「ちょ、待つ、セレーネさま…うわあああああ!?!」

「相変わらずだよな、セアラって。騎士団の立場考えてねえし」

またユーリも同じように騎士たちに連射するセアヴィラを見ていた。

やがて彼女は数人の騎士に取り抑えられ城の自室へと連れていかれ、ユーリは牢獄へと放り込まれた。

『結局ユーリと話せなかったし!あーもう!ユーリの愛がた〜り〜な〜い〜!?!』

ベッドの上でそんなことを口にして枕に顔を埋めながら足をバタバタさせる。そんな時、ドンドンドン、と慌ただしく部屋の扉が叩かれた。

『なに？僕今報告書書いてんだけど？』

出るのが面倒で嘘を吐く。

「すみませんセレーネ様！！ご報告です！エ、エステリーゼ様が城を抜け出そうと城内を逃走中で……！！」

『！』

その言葉を聞いたセアヴィラは直ぐにベッドを降りてブーツを履き、燕尾服に似た服を着て扉を開いた。

『今行く』

緑の髪を鬱陶しそうに払うと、セアヴィラは直ぐに城内を搜索し始めた。

「もう、お戻りください」

「今は戻れません！」

騎士と少女のそんな声が響いた。

『エステリーゼ様…？』

遠くで聞こえたかなり小さい声だったが、聴力が良いセアヴィラには大体どこから聞こえてきたのか把握した。

『逆だったなあ』

小さく呟いて彼女は踵を返して走り出す。暫くすると剣撃の音までもが聞こえてきて、セアヴィラはスピードを上げる。

「ユーリ・ローウェル！どこだ〜！」

「不届きな脱走者め！逃げ出したのはわかっているのである」

その声に、うげ、と心底嫌な顔をした。いやいやそれより、ユーリは脱走したのか。

『流石僕のユーリVV』

「誰がおまえのだ」

『ぎゃあ！ってユーリっVV』

どうやら自分の世界に浸っている内に目的の場所へついたようで、急に目の前にユーリの姿があり、ユーリ不足な彼女は思わず抱きつ

いた。

『は〜…幸せ…vvvv』

「おーい、戻ってこ〜い」

「セアヴィラ…！」

『！あ、見つけました！』

セアヴィラの視線の先には桃色の髪をし、美しいドレスを着た少女。彼女こそがセアヴィラが探していた人物だ。

「セアヴィラもわたしを連れ戻すんですか？」

『あなたが理由を話して下さい、それが僕に理解出来るなら、僕はあなたの気持ちを尊重したいです』

「… 実は」

『おっと、取り敢えずここからは早く離れましょう。歩きながらお願いします』

未だ彼女はユーリの腕に抱きつきながらエステリーゼに提案し、ユーリも仕方なしにセアヴィラたちに付き合う事になった。

「そう言えばあなた、ユーリって…もしかして、セアヴィラやフレソンのお友達の」

彼女らは歩きながら話す。

『うん、恋人VVVV』

「誰が恋人だ」

バシッ

満面の笑みで言う彼女はユーリにしばかれた。セアヴィラは地味に痛む頭を擦る。

「ま、友達だけだ」

「なら、以前は騎士団にいた方なんですよね？」

「ほんの少しだけだけだな。それ、コイツとフレンに聞いたの？」

ユーリの問いかけにエステリーゼは頷く。すると彼は物珍しそうにセアヴィラを見た。

「ふうん、おまえにもあいつにも城の中に、そんな話する相手いたんだな」

『僕は誰にでも話してるよ』

「ああおまえはそうだったな」

真顔でさらっと言う彼女をユーリは軽くあしらう。その時、暫く何かを考えていたエステリーゼはユーリとセアヴィラの前に出てきた。

「あの、セアヴィラ、ユーリさん！それでフレンのことなんですけれど…」

『フレン？』

「ちよい待った。あんた一体、なんなんだ？フレンとコイツの知り合いなのはわかったけど、どうして騎士団に追われてんだよ」

『まあまあユーリ。取り敢えずまずはフレンのとこまで案内しますね。その方が話が早いようですし』

「あ、はい！」

なんかコイツのペースに乗せられたな、とユーリは頭を掻きながらフレンの部屋目指して彼女たちの後を追った。

「この辺り…だったような…」

「…あんたの立ってるそこがフレンの部屋だろ…？」

やがてフレンの部屋の前に辿り着き、三人は扉に手を掛けて彼の部屋に入った。しかし部屋はやけに片付いていて、フレンはどこかへ遠出していることが分かった。

『あちゃ〜…』

「そんな…間に合わなかった」

エステリーゼは頂垂れる。そんな彼女をユーリは振り返る。

「んで、一体どんな悪さやらかしたんだ？」

『ちよ、ユーリ』

「どうして？わたし、何も悪いことなんてしてません」

「なのに騎士に追いまわされるのか？常識じゃ計れねえな、城ん中は」

セアヴィラは迷った。彼女の立場を言うべきか言わざるべきか。

「あの！セアヴィラ、ユーリさん！」

突然彼女は叫ぶ。

『？』

「なんだよ急に」

「詳しいことは言えませんが、フレンの身が危険なんです！わたし、それをフレンに伝えに行きたいんです」

『フレンを…それって…』

「行きたきゃ、行けばいいんじゃないのか？」

セアヴィラの言葉を遮るようにユーリがそう告げる。

「それは…」

「オレにも急ぎの事情があつてね。外が落ち着いたら、下町に戻りたいんだよ」

ユーリはエステリーゼをあしらうように話す。そんな彼にエステリーゼが駆け寄る。

「だったら、お願いします。わたしも連れて行ってください。今のわたしにはセアヴィラとフレン以外に頼れる人がいないんです」

『ええ！？城を出るってことですか！？』

「はい。セアヴィラ。心配ならあなたもついてきて下さればいいですから」

セアヴィラは彼女に攻め寄せられ、立場的にそれを断れなかった。眉間に皺を寄せてユーリを見ると、仕方なさに溜め息を吐いていた。

「わけありなのはわかったからせめて名前くらい聞かせてくんない？」

「あ、はいっ」

エステリーゼが彼に言おうとした時、突然扉が吹っ飛んだ。何事かと思ひ扉の方へ目を向けると、そこには何とも奇抜な髪をした男がニヤニヤしながら立っていた。

「オレの刃のエサになれ……」

彼を見たセアヴィラとユーリは溜め息を吐き、お互い武器に手を掛けた。エステリーゼは反射的に後ずさる。

「ノックぐらいしろよな」

「オレはザギ…おまえを殺す男の名、覚えとおけ、死ぬ、フレン・シーフォ…！」

『ユーリをどっからどう見たらフレンなんだよ！』

彼女はいち早く双銃をぶっ放した。しかしそれは容易く避けられる。

「そうそう、人違いだっつーの」

「死ぬ」

ザギは容赦なく斬りかかってくるが、ユーリはそれを素早く刀を鞘から抜き、軽々と止めた。

「ちったあ人の話聞いた方がいいぜ」

「ザギだ。オレの名前を覚えておけ、フレン」

「フレンじゃねえよ、聞け！」

ユーリは力でザギを押し返す。それを狙ってセアヴィラが銃を撃つが、ギリギリ避けられ彼女は舌打ちをする。

「ククク、何だよおまえ」

「おまえこそ何だよ」

『僕を無視すんな!!』

狙って双銃を撃つ彼女だったが、彼の動きが素早く中々当たらない。イライラしたセアヴィラは左目に付けた眼帯を取る。

「オレはおまえを殺して自らの血にその名を刻む…!!」

「最高に趣味悪いな」

『悪すぎ、でしょ』

両目で敵を定め、ドン、と一発彼の腕に銃弾を撃ち込んだ。ペロリ、と口元を舐め、ザギを見やるとようやく彼はこちらを見た。

「楽しく、楽しくなってきたぞ……」

『はっ！余裕ぶっこいてんのも今のうちだよ。侵入者は徹底的に潰さないとなー！』

「行くぜ、セアラ」

『うんゝゝ』

ユーリの声に彼女は銃を構え直す。前衛にユーリ。彼は蒼い斬撃を繰り出す。それに続いてセアヴィラが双銃から交互に弾を連射し、それが着弾すると爆発する。

『行っけエ！？フレアショット?!?!』

「？蒼破刃?!！」

次に放った二人の技は見事ザギに命中した。しかしそれによって発生した煙により、視界が悪くなる。そこから二人の攻撃を食らったはずの彼が飛び出して来るなんて思わなく。

「なっ」

『ユーリ!?!』

ザシュ!

『っ!?!』

「セアラ…!?!」

飛び出して来た彼に咄嗟に反応したセアヴィラはユーリとザギの間に立ち塞がり、ユーリの代わりに刀を受けた。裂けた肩からは止めどなく血が流れ出す。

『（っこいつ…無茶苦茶だけどかなり強い…！！）でも負けるなんてありえない。こんなんじゃ守護役の名が廃るよ…！！』

「セアラ、おまえ馬鹿か」

『！ユーリ……』

セアヴィラは傷口を強く押さえ、銃を構える。それを見たユーリは傷付いた彼女を守るように背に庇う。

「いい感じだ」

「はあ？何がだよ。こっちはちつともよくねえよ」

「いいな、その余裕も」

『あんた何かに僕らが負けるわけないじゃん』

ニツ、と笑って銃口をザギに向けると、彼は狂ったかのように笑い出す。

「あははっ！！さあ、上がってキタ！！上がってキタ！！いい感じじゃないか！！」

「急に変わりやがったな」

『ユーリ以上の戦闘狂だね』

「おまえが言うか？」

セアヴィラは傷口から手を離し、そうかなあ、と笑って誤魔化する。

「あはははははっ！！」

ザギは哄笑し、こちらに向かってくる。ユーリは剣で剣を、セアヴィラは銃で彼の蹴りを止めた。

「くっ」

「わたしもお手伝いします！」

『ダメです！』

「くるなっ！」

見ていられなくなったのか、エステリーゼが駆け寄ってき、二人は同時に力でザギを弾く。

「でもセアヴィラだって怪我をしていますし！」

「ああ、いいぜ！何人でも掛かって来い！」

「…無理しねえでやばくなったら退けよ。治療が出来んなら先にこいつを見てやってくれ」

『ちよつとユーリー！』

「はいっ！」

ユーリに言われ、エステリーゼはセアヴィラの方へと駆け寄る。彼女がここに立つことは嫌だったが、セアヴィラは彼女の強い意思に折れた。

「簡単に終わらせないでくれよ？こんな闘いは久しぶりなんだからなあっ！！」

「まったく、本気でなんなんだよこいつ…」

「セアヴィラ、大丈夫です？」

『僕なら大丈夫です。それより僕より前には出ないでくださいね』

「そんなことより先ずは傷を…」

痛々しい肩の傷に彼女が手を翳すと淡い光が傷を癒す、ハズだった。エステリーゼは治っていない彼女の傷に目を見開いた。同じようにセアヴィラも驚く。

「ど、どうして…!?!」

『わ、分かりません。…取り敢えず、今は向こうに集中します。傷は後で自分で治しますから』

「は、はい…!」

しかし

『っ!?!?』

突然セアヴィラは膝を着く。まるで身体の中で何かが這いずり回っているような感覚に襲われた。

「セアヴィラ!?!」

『っ何でもありません!下がって下さい!』

セアヴィラは気持ち悪さに耐えて、再び双銃を持ち直す。その数歩後ろではエステリーゼが剣と盾を持って構えた。

「ひやははは!楽しいじゃねえか!」

ユーリは彼の攻撃を受け続け、ザギを見ていたエステリーゼがユーリに、落ち着いて、と告げる。

「ああやってこっちのペースを乱そうとしてるんです」

「おまえが落ち着け。あいつにそんな深い意図ねえって」

「え、じゃああれが素なんです？」

『完璧素ですなえ〜』

銃を撃ち、前衛の彼の援護をしながら話す。後ろのエステリーゼも回復術でユーリの傷を癒している。

「ごちゃごちゃ喋ってたら死ぬぜ、フレン」

「だから人違い…って話しても無駄っぽいな！」

「でも誤解なら戦いより話し合いの道を…」

『いや、どう考えても無理ですよ〜』

この状況じゃ話し合いも何も出来ないだろう。その上相手が全くこっちの話を聞いてくれない。彼女らは何度も向かってくるザギの攻撃を受けたり、避けたりしながらこちらも攻撃をする。

「あははは！オレと会ったが運の尽きだ！」

「セアラの言う通りだな。話し合いが出来る状態じゃねえよ。倒しちゃまった方が早い！」

『そつだよ、ねエー！』

ドンー！！

再びセアヴィラの銃弾がザギの身体を貫く。しかし致命傷は避けられたようだ。

「っは、強えじゃねえか！…ひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！！痛え！痛え！」

『ヒイ！マゾ！？ユーリもっ僕ヤダよあいつー！！』

「んじやとつと片付けるか」

ユーリは刀を握り直し、地面を強く蹴ってザギに向かっていく。セアヴィラはと言うと、銃口を彼に向けたまま意識をそこへ集中させる。

『ゆらめく焔…？ファイアボール?!！』

「ぐああ!!!」

彼女が放った魔術が命中し、ザギは熱さと痛さで悶えた。その隙にユーリが彼に一撃を食らわせる。

「はあッ!!!」

ザシュ!

「うぐ…ッ」

鮮血が辺りに飛び散った。ザギはよろめき、片膝をつく。どつちから致命傷を与えたらしい。

チャッ

セアヴィラは銃口をザギに突き付け、勝ち誇ったように口角を上げた。

『勝負ありだよ』

「相手、完璧に間違ってるぜ。仕事はもっと丁寧にやんな」

「この人はフレンじゃありません」

「そんな些細なことは、どうでもいい！さあ、続きをやるぞー！」

勝負は見えてると言うのに何故こつも余裕があるのだろうか。ユリはただただ溜め息を吐いた。

「そりゃ、どついう理屈だよ。ったく、フレンもとんでもねえのに狙われてんな」

『…ねえ、もう良いよね』

人は稀に非情になる。セアヴィラはそういうタイプだった。人がプライベートと仕事の時間を割り切るように、セアヴィラもまた時と場合を割り切っていた。

カチャ

ヒュン！

『っ！？』

セアヴィラが引金を引こうとしたその時だった。扉の方からナイフが飛んできて、彼女は咄嗟に飛び退いた。

「ザギ、引き上げだ。こっちのミスで、騎士団に気付かれた」

現れた男がそう告げると、それが気に入らなかったのかザギは男を殴った。そしてまた哄笑した。

「うわははははっ…！オレの邪魔をするな！まだ上り詰めちゃいな
いー！」

『どこに？天国への階段？ああ違った地獄だったね』

「言えてるな」

ハツ、と嘲笑ってセアヴィラが言うと、ユーリも同じようにザギを見る。

「騎士団が来る前に退くぞ。今日で楽しみを終わりにしたいのか？」

そう言った次の瞬間、ザギは男を自分の剣で切り刻んだ。その光景に思わず息を呑む。男を殺したザギは何も言わず、そのまま去っていった。

「ここもゆつくりできねえのな…女神像の話に賭けて、さっさとおいとまるるか」

『…そーだねえ…って女神像？』

セアヴィラはユーリに問うが、エステリーゼの言葉で遮られる。

「あの、セアヴィラ、ユーリさん」

彼女に見つめられ、セアヴィラは苦笑してユーリを見る。彼は仕方なさげに溜め息を吐いていた。

「わかったよ。ひとまず城の外までは一緒だ」

『なら僕もVV』

「はい、あの、ユーリさん。わたし、エステリーゼっていいます」

「んじゃあ、エステリーゼ、急ぐぞ」

そう言い、エステリーゼの頼みでドアを直し、部屋を出た。しかしかなり城内が騒がしい。先程の連中のせいだろうか。…ユーリのせいもありそうなのだが。

途中エステリーゼが転びそうになり、ユーリの提案で彼女は服を着替えることになって、彼女の部屋へ向かう。

「ここがわたしの部屋です。着替えてきますので少し待っていてください」

『ではエステリーゼ様、僕が…』

「いえ、セアヴィラ。あなたは先に自分の怪我を治してください」

彼女はハツとする。思えば傷の事はすっかり忘れていた。痛みもそれほどなかったからだ。

エステリーゼが自室に入ると、セアヴィラは力が抜けたように壁伝いに座り込んだ。どうやら随分と気を張っていたらしい。

「で？おまえは何で傷そのまんまなんだ？…それとあのお嬢さまとの関係は？」

『傷は痛くなかったし？エステリーゼ様とはただの話し相手。それと、護衛に雇われただけ』

いつも通りにへらりと笑い、傷口に手を翳して治療をし始める。するとさつきは治らなかった傷がみるみる治っていく。彼女は内心驚きながらも平静を装う。

「…ふうん」

『やだ、エステリーゼさまの事を内緒にしてたの怒ってんの？』

「別に」

『僕にも色々と契約があるんだよ。本当は僕だってユーリに隠し事したくないんだよ？恋人だしv v』

「ふざけんな」

バシッ

冗談じゃないのにな、と言いながら彼女はユーリにぶたれた頭を擦った。

『僕はいつだってユーリのが好きなのになv v』

「はいはいはい」

セアヴィラがハートをばらまいてユーリに抱きつくが、やはりいつものように軽くあしらわれる。しかし彼女は打たれ強いらしく、諦めることはなかった。

「お待たせしました」

やがてエステリーゼが部屋から出てきた。その格好は先程とは打って変わって、白を基準としたドレスのようなワンピースのような服だった。

「あ、あの…おかしいです?」

「…いや、似合ってるねえなと思って」

『すみませんけど僕も…』

「そつでしようか?」

とまあ二人はそう思うが別に文句を言うつもりはない。本人が良いと言うなら良いんだろう。そんな彼女はユーリの前に歩んでき、片手を彼に差し出す。

「何、これ?」

「よろしくって意味です」

『ああああ! エステリーゼ様でもユーリと握手はダメです!』

「え、あ、はい？」

代わりに僕が！、と強引にエステリーゼの手を握るセアヴィラ。ユーリはそれに呆れてさっさと歩き出した。

『うわぁん！待ってよユーリィ！』

「！！？だから一々抱き着くなっつーの！」

『ヤダヤダ！僕の愛を受け取ってくれるまではっなっさっなっいっ
！！』

「ああはいはいそうですかそうですか」

エステリーゼそんな二人のやり取りをきよとんとして見ていた。見たことがないセアヴィラの姿に、彼女に自然と笑みが溢れた。

暗殺者と癒えない傷

(たまたま治らなかつただけ、かな?)

01 暗殺者と癒えない傷（後書き）

ユーリにぞっこんラブ（笑）

自分が犠牲になるうとも彼女は気にしません（＾p＾）

02 晴れ渡る旅立ちの日

僕はやっぱり

この街が大好きだ

ユーリの次くらいにね

エステリーゼが着替え終わった後、城の外へ出ようと女神像へと向かう三人。相変わらずセアヴィラはユーリにベッタリだ。そんな中、そう言えば、とエステリーゼが彼に問い掛ける。

「ユーリさんはどうしてセアヴィラのことを？セアラ？って呼ぶんです？」

「あぁ？どつしてって？セアヴィラ？なんて長ったらしい名前呼んでらんねーだろ」

「そういうものなんです？」

『僕は気に入ってるから好きですよ、セアラって呼ばれるのvv』

「セアラ、ですか…」

エステリーゼは悩むようにセアヴィラのあだ名を呟いた。しかしユーリもセアヴィラもそれには気付かず、先を進んでいく。

やがて女神像のある広間に出た。

「お前、セアラとフレンとは知り合って長いのか？」

ユーリがエステリーゼにそう問い掛ける。彼女は考えるように視線を俯けた。

「ええつと…フレンとは二年か、三年…セアヴィラは確か四年…多分それくらい前だったかと…」

「ふうん…セアラは兎も角、あいつ、城の中で上手くやってんの?」

『僕はスルーなの?』

「お前見れば問題ないことないのは分かる」

『やーんちゃんと見てくれてるなんて僕嬉しいよ、ユーリVV』

「はいはいはい」

すり寄ってくるセアヴィラをいつものように軽くあしらって、ユーリは改めてエステリーゼに聞く。

「フレンはとても真面目で誠実ですから、周りの人からも信頼されているみたいですよ。大きな任務を任されることも、増えてきたと先日話してくれました」

「真面目で、誠実ね。頭が固くて、融通が利かない、とも言っけどな」

『うーん…言えてるかも…』

「セアヴィラ?ユーリさん?」

不思議そうにこちらを見るエステリーゼを見ぬ振りをして、ユーリは女神像へと歩を進めた。それをセアヴィラは追いかける。

『ユーリ?』

「ふーん…これが……」

「この像に何かあるんです?」

「秘密があるんだと」

ユーリの言葉に疑問を持ちながらエステリーゼは女神像の周りを歩く。セアヴィラはぺしぺしとそれを叩きながらユーリに目を向ける。

『動かしたら秘密の抜け穴があったりして』

「まさか……」

「ま、やってみる価値はあんじゃねえの」

そう言いながらユーリが女神像を動かすと、そこには人ひとり通れ

るくらいの穴があり、下に降りられる階段があった。

「…………え？本当に…？」

「うわ、本当にありやがった…」

『なんてベタな展開』

セアヴィラは乗り出すように穴を覗き込むと、その後ろからエステリーゼが同じように穴を見た。

「もしかして、ここから外に？」

「保証はない。オレは行くけど、どうする？」

そう言ってユーリはエステリーゼを振り返る。セアヴィラも自然と彼女に視線をやった。彼女は少し悩んだ後、覚悟を決めたように顔を上げる。

「……………行きます」

『ユーリとエステリーゼ様が行くなら、勿論僕も』

「なかなか勇気のある決断だな。ま、セアラは兎も角」

『何で〜!?!?』

ぷくつと膨れてユーリを振り向くと、何やら呟いていたのが見えた。しかし気にする間もなく、ユーリが穴へ近付く。するとエステリーゼが制止の言葉を掛けた。

「どうした? やっぱり、やめんの?」

「いえ、手、ケガしてます。ちょっと見せて下さい」

エステリーゼがユーリの手を取り、治療術をかける。しかし彼は驚いたようにエステリーゼの手首についている魔導器を見て、彼女の腕を掴んだ。

「きゃあっ!」

『ユ、ユーリ!?!?』

いきなりすることに驚いたエステリーゼは慌てて彼の手を振り払う。

「あ、悪い……。綺麗な魔導器だと思ったら、つい、手が」

「本当に、それだけです？」

「ほんとにそれだけ。……手、ありがとな」

「……い、いえ、これくらい」

それを見ていたセアヴィラは二人の間に割り込んでユーリの腕を取った。そしてそのままエステリーゼを振り返る。

『例えエステリーゼ様だとしてもユーリは譲れません！！』

「あほか」

『痛ッ！？』

相変わらずのセアヴィラにデロピンを食らわすユーリ。セアヴィラはおでこを押さえながら、柔らかく微笑んだ。

「っ……行くぞ」

『はいVV』

「はい！」

ユーリ、セアヴィラ、エステリーゼの順に階段を降りていく。中は薄暗く、じめじめとしている。正直こんなところ早く抜けたかったが、どうもそうはいかないらしい。

「…っと、ちゃっちゃと片付けますか」

「セアヴィラ、ユーリさん、前からも…！」

「ちっ…厄介だな」

前からも来る魔物を見てから、セアヴィラは腰のフォルダーから二丁拳銃を取り出す。同時にユーリも鞘から刀を抜き放った。

『僕がバツクアップするから思いっきり暴れていいよ、ユーリ！』

「じゃあ後は任せませ！」

「わ、わたしもお手伝いします！」

『無理をなさらないで下さいね！！』

それから三人はあつと言う間に魔物を倒した。ユーリとセアヴィラは慣れてる為か汗ひとつ掻いておらず、平然としていた。

「…ま、こんなもんか」

『案外楽だったね』

二人は各々武器を仕舞うとへたりこんでいるエステリーゼを見る。セアヴィラは軽く微笑むと彼女の腕を掴んで立たせた。

『大丈夫ですか？』

「何とか…いつぺんに襲われた時はどうなるかと思いました…」

ぐいっと汗を拭いながらエステリーゼは言う。

「敵は各個撃破が戦闘の基本だけど、たまにやこついうのもある」

「そうなんです？じゃ、気を付けて進んだ方がいいですね」

「少ない敵を相手にして確実に倒すか、いつぺんに多くの敵を薙ぎ倒すか、それは好みによるけどな」

エステリーゼはその言葉に首を傾げ、セアヴィラとユーリを交互に見やる。

「セアヴィラとユーリさんはどっちなんですか？」

「どっちでもいいだろ」

『聞かない方がいいですよ』

あはは、と笑って誤魔化す。聞かない方がいいことは世の中に沢山ある。エステリーゼがした質問はこの類いに入るだろう。

「ほら、急ぐぜ」

『はいはいVV』

「あ、ちよつと…待って下さい」

ユーリの先導に従って着いていくセアヴィラとエステリーゼ。勘に頼って道を進んでるのだが、どこも同じような道ばかりだ。

「地下の通路を教えてくれた人に感謝しなきゃいけませんね」

そんな中、エステリーゼがユーリに話し掛けと、彼は面倒くさそうに対応する。

「別におまえが感謝する必要はないんじゃないか」

「わたしだって、外へ行きたかつたんだから、あなたとおんなじで

す

「それならそれでいいんだけど…なんでか、素直に感謝する気になれないんだよな」

地下通路を教えてもらったことに不服があるのか、そんなことを呟くユウリ。

「ダメです、恩ある人にはちゃんとお礼しないと」

セアヴィラは苦笑いをしながらその会話を聞いていた。エステリ―ゼはいつも人に優しく人を敬っている。そこがいいところだともセアヴィラは思う。

『エステリ―ゼ様らしいですね』

「会ったこともない相手によくそう律儀になれるもんだな」

「会ったことのない人だからこそ、礼を失してはいけません」

「ふーん、そういうもんかね」

「そういつものです」

そこで会話が途切れ、三人はただただ道を進んで行く。何度か魔物と戦いながらも出口と思わしき上に登れる階段を見付けた。

『あれかなあ。登ってみるよ』

「いや、オレが行く。セアラはこいつと後ろからついてこい」

『!…うん、ユーリ!…(やっぱりユーリって優しいよね。素直じゃないけどvvv)』

嬉しそうにユーリに抱きつくセアヴィラ。ユーリは軽く彼女を促してから階段を登り始める。セアヴィラとエステリーゼはその後に続いてゆっくりと登っていく。

「うわ、まぶしっ」

『うっそ!…ってことは一晩地下通路で迷ってた訳!?!』

「あゝあ。一晩無駄にしたな」

外に出たユーリは眩しそうに目を細めて辺りを見回す。続いてセアヴィラとエステリーゼも地上へと出た。

『あれ？ここ貴族街？』

「こんなところに繋がってんのか」

『っにしても、もう朝か〜』

セアヴィラが欠伸をしながら背伸びしていると、突然後ろから歓声が聞こえた。振り向くと辺りを見て目を輝かせているエステリーゼがいた。

「すごいですセアヴィラ！！窓から見ると、全然違って見えます」

「そりゃ大げさだな。城の外に来るのが、初めてみたいに聞こえるぞ」

「…そ、それは…」

『僕が知る限りではエステリーゼ様は殆ど外に出てないらしいよ』

慌ててセアヴィラはフォローすると、ユーリは然程気にすることなく視線を反らした。

「ま、お城に住むお嬢様ともなれば好き勝手に出歩けないか」

「は、はい、そうなんです」

「ま、とりあえず脱出成功ってことで」

ユーリはそう言って片手を上げる。エステリーゼはその意味が分からず、首を傾げてユーリの上げた手のひらに人差し指をくっ付ける。

「あはは…」

「あ、あの、何か間違えました？」

「うーん、そうだな。んじゃセアラ。ほら」

『待ってたよユーリっVV』

うずうずしてる彼女を見てか、ユーリはセアヴィラに声を掛けて再び片手を上げる。そして、パン、と良い音が響いた。

「こんな感じ？」

「な、成る程！」

『ハイタッチって言うんですよ』

満足そうに笑顔になりながらセアヴィラが言うと、ユーリが視線を二人に向ける。

「…で、エステリーゼは、これからどうすんの？」

『うーん…城を出てきたのはいいですけど…エステリーゼ様はもしかして…』

「はい。フレンを追います」

やっぱり、とセアヴィラは溜め息を吐く。

「行き先知ってんのか？」

「先日、騎士の巡礼に出ると、話していましたから……」

エステリーゼの言葉に思い出したようにユーリは苦笑いする。巡礼とは帝国の街を回って善行を積んでくるというものだ。

「だから花の街ハルルを目指します。騎士の巡礼では最初にハルルへ行くのが慣わしですから」

「となると、結界の外か」

「ユーリさんは結界の外を旅したことがあります？」

「少しの間だけならな。外ならセアラの方が詳しいし……興味はあるけど、下町を留守にするわけにはいかないしね。オレも下町に戻るから、街の出口まで案内するよ」

「ありがとうございます」

ユーリの言葉にセアヴィラは、えー、と不貞腐れる。彼は眉を潜めて彼女を振り返った。

「なんだよ……」

『ついてきてくれないのー！？』

「お前は強いんだからひとりでも大丈夫だが」

『女の子二人で行かせる気なんだ！？ユーリの薄情者ー！』

「はいはいはい。もういいからほら、戻るぞ」

膨れたセアヴィラにヒラヒラと手を振りながらユーリは歩き出す。セアヴィラは暫くその背を見詰め、大きな溜め息を吐いた。

『エステリーゼ様、申し訳ありませんが下町の出口で待っていてくれませんか？僕まで勝手にいなくなる訳には参りませんので、上手い具合に都合をつけてきます』

「都合、ですか？」

『はい。どうなるかは分かりませんが…取り敢えず行ってきます』

「はい。お気を付けて」

セアヴィラはそう言い残して城の中へ入っていく。案の定、ユーリが脱獄したという騒ぎ、さらにエステリーゼがいなくなったという騒ぎが城中に広がっていた。

「！セレーネ様！どこに行っておられたのですか！！」

『勿論エステリーゼ様探し。で、エステリーゼ様は？』

「そ、それが、何人かがユーリ・ローウェルと共にいたところを見た
と…」

『ユーリ、とね…』

兵士から話を聞いていると、他の兵士からユーリとエステリーゼを目撃したという報告があった。それを一番に聞いたルブラン隊が下町へと向かったらしい。

「セレーネ様もユーリ・ローウェルを捕縛せよとのご命令がかかっております！」

『…はあ。エステリーゼ様やヨハン様に命令されるなら兎も角、他人に命令される覚えはないんだよな…まあ、行くか』

そんなことを言ってるが、内心はかなり焦っていた。あそこで二人にしたのはまずかったかも知れない。セアヴィラは平然を装いながら急いで下町へと向かう。

すると途中で倒れているアデコールとボツコスを見付けた。

『何やってんの、デコボコンビ』

「セレーネ様!？」

「あの、そのっ、ユーリ・ローウェルが!」

『ああはいはい分かった分かった。で、ルブランは?』

聞くとユーリを追いかけて下町へ行ったとのこと。セアヴィラは、ご苦労様、と彼らを見殺しして下町への坂を駆け降りた。そこはまるで何かのイベントがあったかのように下町の住人たちが溢れかえっていた。

『ちよ、ハンクスじっちゃん!？この騒ぎは…ってそれよりユーリは!？ユーリは!？』

「既に外じゃ！ピンク色のお嬢さんも一緒だったぞ」

『っ、ハンクスじっちゃん！僕も行ってくる！無茶はしないでね！』

「ん？ああ、おまえさんもな！！」

『あ、それと部屋にある僕の鞆の中のもの、適当に使っちゃっていいからな！！』

セアヴィラはハンクスに向かって叫んだ後、建物を伝って出口を目指す。一応鞆の中にはお金や食料、そして水が大量に詰めてある。きっと役に立つと思う。もう少しで出口と言ったところで、今度はルブランが倒れていた。

『だから何やってんだよ』

「セレーネ様！？あわわ、申し訳ありません！ユーリ・ローウエルとエステリーゼ様を逃してしまいました！！」

かなり動揺してる彼を見て、今日何度目かの溜め息を吐いた。

『アレクセイに伝えて。僕はユーリとエステリーゼ様を追う。文句

は言わせない、ってね』

「な、何をおっしやって…」

『…僕は守護役だガーディアンよ？ エステリーゼ様を守るのが僕の仕事。今の僕じゃユーリと戦っても勝てないから、エステリーゼ様を助けられないだろうしね。だから僕はエステリーゼ様についていくよ』

バサツと髪を払ってセアヴィラは下町の門を潜り、外へ出た。空を見上げれば真っ青な空が広がっていて太陽が眩しく輝いている。

『うん、良き旅立ち日和かな！…なんちゃって』

軽くストレッチをしてからセアヴィラは北の方向を見やった。

『ハルルを目指すってことなら、まずはデイドン砦だよね』

そう呟いてからセアヴィラは駆け出し、暫く走り続けると、漸くユーリたちに追いついた。そこにはエステリーゼの他にラピードもあり、セアヴィラに気付いたラピードは勢い良く彼女に飛び付いた。

「ワフツ」

『わっ!?!ラピードっ、ちょ、待っ!ひゃっ、く、くすぐりたい!』

「……………」

ラピードは尻尾で彼女の首元や脇をくすぐる。そんな様子を見てたユーリは、あくまで冷静な態度でラピードをセアヴィラの上から退けた。

『ほえ?ユーリ?』

セアヴィラはキョトンとしてユーリを見た。

「なんでもねえよ」

『? そっ?それよりユーリも一緒に行ってくれるんだね!嬉しいよ』
『よ』

「成り行きだよ成り行き。下町のやつらに色んなもん渡されたから行かないわけにもいかねえしな」

ユーリはもらったものが入ってあるう袋をセアヴィラに見せながら言う。彼女はしゃがみこんで、僅かにすり寄ってきたラピードを撫でながら嬉しそうに微笑んだ。

「あの、ユーリ、セアヴィラ、こちらの犬は…」

それまで微笑ましく見ていたエステリーゼが、ラピードを見てふとそんな質問を問い掛ける。

『ラピードのことですか？』

「こいつはオレの相棒だ」

「ワンー！」

「あ、こちらこそよろしくお願いします」

え、とユーリとセアヴィラは彼女を見る。

「こちらこそって、ラピードが何言ったか、わかったのか？」

「いえ、全然……」

『あはは…そりゃそうですよね…』

セアヴィラは苦笑いしながら、よっ、と立ち上がり、そろそろ行くうか、と二人に提案する。

「んじゃ行くか、セアラ、エステル」

「はい、ユーリ！」

『？エステル?!?!?ユーリ?!?!?』

思わずセアヴィラは叫んだ。さっきの短時間に一体何があったと言
うんだ。訳の分からないセアヴィラはかなり動揺する。

『何それふたりとも!?!』

「何って…オレなりの呼び名?」

「さん付けではよそよそしいと思ひまして…」

セアヴィラは二人の言葉を聞いて呆然とした後、ラピードを抱いてぐずりだす。彼女にとって例え守るべき人であっても、そういう感情がなくても、女性が好きな人に（距離的にも気持ち的にも）近づくと嫉妬するらしい。隠さないのは彼女らしいとも言えるのだが。

『うわぁん!もういいよー!!好きにして!!僕のことほっといてー!!…!!』

「い、一体どうしたんです、セアヴィラ?」

「放っておけ。ほら、行くぞセアラ」

『ユーリの、バカあ…』

「はいはい」

ユーリはセアヴィラの腕を引いて立たせて、頭を数回叩いて慰めた。何が何だか分からないエステリーゼ、基、エステルは首を傾げてい

た。

晴れ渡る旅立ちの日

(やっぱりユーリが好きだ！これだけは譲れない！！)

02 晴れ渡る旅立ちの日（後書き）

うまい具合に理由づけ、たのめ、これ？

03 平原を駆る魔物の群

いつかこうやって

大好きな人と

世界を見て回りたいて

思ってたんだ

さわさわと心地よい風がセアヴィラの長い緑の髪を撫でる。その隣には服も髪も真っ黒な青年ユーリと、ピンクを基準としたドレスのような服を着たピンクの髪の少女エステリーゼ。そしてどこか凜々しい犬、ラピード。

「しかし、こんな形で旅に出ることになるなんて思わなかったぜ」

『いいじゃん！僕はユーリがいるだけで幸せだよおVV』

「お前はな」

ふとユーリが溢した言葉にセアヴィラが反応するが、やはり軽く流される。

「ユーリは帝都から離れたくなかったんです？」

「ん？まあ、下町なんかに住んできると、今日を生きるのに精一杯だね。あんまり真剣に考えたことなかったんだよ。漠然と旅に出てみたいとは思ってたけどな」

確かに、貴族街と比べれば下町は結構悲惨な状況だ。何度下町の住人たちが現状を訴えようともし騎士団は取り繕ってはくれなかった。そんな騎士団を何度止めたいと思ったことか。だけどユーリやフレン、そしてエステリーゼがいてくれたから、彼女は今も騎士団に所属しているのだ。

「わたしは、ずっと外の世界に憧れていました。ただ、外にいるだけで、感激してます」

セアヴィラが知る限り、彼女は一度も城の外に出ていないと聞く。故にセアヴィラと共に外を歩くのも初めてだ。彼女もまた、それを新鮮だと思っている。

「ま、感激するのもいいけどほどほどにな。フレンがピンチなんだから」

「だから、フレンを心配しながら感激してるんです」

「フツ、わかったよ」

小さく笑うユーリに、セアヴィラもつられて笑った。

ふ、とセアヴィラは帝都を振り返る。いつの間にか帝都が見えなくなる程の距離を歩いていた。そんな彼女の隣にユーリが並ぶ。

「ずいぶんと帝都から離れたな」

「そうだね、もう殆ど見えないもんねえ」

「ええ…ここまで逃げてくれば、大丈夫でしょうか」

さらにエステリーゼが隣に並びながら言う。ユーリは、さあな、と
答え溜め息を吐いた。

「無駄に連中しつこいからな」

「ワン！」

「ん…？」

『ラピード…どしたの？』

三人が話してる中、突然ラピードが後ろを向いて吠えた。彼女たちはどつしたのかとそちらを振り返る。

「…む…」

「…む…」

そこには馬車があり、その傍らにはその持ち主であろう人が二人立

っていた。

「こんにちは」

「いらっしやいませえ」

エステリーゼが挨拶をするとそう返ってき、ここはお店なのかと尋ねる。聞けば旅をしながら宿を提供してるらしい。一行はお言葉に甘えて一晩をそこで過ごすことにした。

『やぐんユーリと一緒に寝るなんていつ以来かなあ』

「ああそうだな」

『ユーリ棒読みすぎだよ』

しかしセアヴィラは落ち込むことはなく、するり、とユーリの腕に絡み付く。

「確かフレンもお二人とは幼馴染みでしたね」

「まあこいつとは兎も角、フレンとはただの腐れ縁だよ」

『でも仲良いもんね!』

「だからそれが腐れ縁なんだよ」

『あれ、そうだっけ?』

あはは、と笑いながらセアヴィラはゴロンと布団に寝転んで目を瞑る。そんな彼女を見て、ユーリとエステリーゼも身体を倒し、眠りについた。

翌日、この宿のおかげで追っ手を気にすることもなかった一行はぐっすりと眠れた。カレンとリッチと名乗った二人にお礼を言い、再び歩を進めるセアヴィラたち。

「ユーリは魔術を使わないのです?」

そう言えば、と毎回ユーリの戦いを見ていたエステリーゼがそう問い掛ける。

「使わないんじゃないじゃなくて使えねえの。オレ、そっちの才能はないらしくてね」

「でも、プラスティファ魔導器さえあれば、魔術の理論を学ぶことで誰でも使えるようになるはずですよ？そつですよね、セアヴィラ」

隣のセアヴィラに振ると、彼女は苦笑いを試ながらユーリに視線を向ける。

『まあ基本はそつです。でもユーリの場合は…』

「その魔術の理論を学ぶ才能ってのが、オレにはなかったって話だよ」

「それってつまり、ユーリは勉強が嫌いなんですね」

「そつとも言つな」

今の発言を聞く限りそつとしか言えないだろう。勿論セアヴィラは知っていたので何も言わなかったのだが。

「セアヴィラ…セアヴィラはいつもこんな広い世界を旅していたのですね」

『エステリーゼ様？』

「いきなり、何を言い出すんだか」

「帝都も凄く広いと思いましたが、外はもっと広いじゃないですか。あの空なんて、どこまで続いているんでしょう…：…わたし、こうやってセアヴィラの隣を歩くことを夢見てました」

突然彼女は青く広がる空を見つめながらそう言った。外に出ることを禁じられていたエステリーゼはいつもセアヴィラが持つてくる土産話を聞いていた。任務先であったこと、話したこと、魔物を退治したこと。エステリーゼにとって外は未知なる世界だったのだ。

「ま、その気持ちも、わからんではないか。下町に比べりゃ、バカみたいに広いもんな」

『これからきつと、色んなものが見えるようになりますよ』

セアヴィラが楽しそうに言うと、エステリーゼは笑顔で頷いた。

やがて一行はテイドン砦に到着する。見回せばあちらこちらに騎士団員がいるのが分かった。エステリーゼは彼らを警戒するようにユーリを見やる。

「ユーリを追ってきた騎士でしょうか？」

その言葉にユーリはセアヴィラを振り向く。しかし彼女は、分からない、と首を振った。

「だよ。ま、あんま目立たないようにな」

「はい。わたしも早くフレンに追いつきたいですから」

「んじゃ、さっさと砦を抜けますか」

そう言つて門の方へ歩き出すユーリだったが、エステリーゼは何かに引かれるように二人から離れる。セアヴィラは苦笑いをして彼女を見ていた。

「ほんとに分かつてんのかね」

『まあまあ。エステリーゼ様は何もかもが初めてなんだから仕方ないよ』

宥めるように言つと、ユーリは仕方なしにエステリーゼがいる方へ向かった。セアヴィラもその後についていく。

「はい、いらつしやい。今日はいいい品入ってるよ。かの剣匠アツサムが打つた武能スキルの宿つた名剣だ。旅をするなら武能は重要だよ。是非お試しあれ」

「武能つて？」

声をかけられた商人の聞きなれない単語に、ユーリは問い返す。

「？武能とは武器に宿った戦闘技術の事。戦闘技術は本来、誰かに師事し、教わるものだが、剣匠アツサムは特殊な方法を用い、その技術を武器に封じ込めた？」

エステリーゼはまるで何かに取りつかれたように武能の説明をし出す。

「？武醒魔導器には、力を封じ込めた武器より技術を習得する機能がある。武器を使い続けることでその武器に宿った武能を装備者に還元することができる？んです」

長々とした説明にセアヴィラは口元を引きつらせた。暫く会ってなかったが、彼女の頭の中は変わってないらしい。

『あはは…相変わらず凄いですねえ…』

「昔にクリティア族が人間に伝えた和本にありました」

「へえ〜武醒魔導器って技や魔術を使う為だけかと思ってたぜ」

ユーリは自分の右腕につけてある魔術をに目を向けた。

「自分に合った戦いをするために、武能を考えながら武器を選ぶつてのが賢いってものさ。武能の無い、単純に攻撃力の高い武器もある。闘い方は好みだけどね」

『あー、説明はいいよ。この本に載ってるし、それに僕も知ってるからさ』

セアヴィラはめんどくさそうに商人をあしらう。エステリーゼ程ではないが、セアヴィラも結構博識なのだ。

「ってわけだ。それよりおっさん、こんな場所で商売やってて繁盛してんの？」

「いやあ、俺も好きで、ここにいるわけじゃないんだ。砦の向こうに魔物が出ちまって足止め食ってるのよ」

「魔物がね……だ、そうだぞ？」

そうエステリーゼに振るが、彼女は本に夢中で聞いちゃいなかった。まあまあ、とセアヴィラはユーリの肩を叩く。

「…え？なにか言いました？」

「セアヴィラと情報集めてくるから、そこで待ってけって言ったの」

『ちょ、待ってよ〜』

さっさと歩き出すユーリに慌てて着いていくセアヴィラ。その後にはステリーゼも追いかけてきた。腕に先程の本を抱えて。

「その本、面白いの？」

「面白いですよ。あとでセアヴィラとユーリにも貸してあげますね」

「気が向いたらな」

『ですね〜』

行くぞ、と二人に声を掛け、三人は情報収集の為に砦内を散策し始める。その途中、突然辺りに警鐘が鳴り響いた。門の向こうからは人が逃げるように砦の中へと入ってくる。しかしまだすべての人が入りきっていないと言うのに、扉を閉めろとの言葉がかかった。

「あれ、全部、魔物なの…」

「帝都を出て早々にとんでもないもんにあつたな。オレ、なんか憑いてんのか？」

『ユーリ』

「ああ」

セアヴィラが流し目でユーリを見やると、二人は門へと走り出した。その後ろをラピードがついて来て、扉を閉めようとする騎士団を阻止する。その際にユーリとセアヴィラは門を潜った。

『エステリーゼ様、絶対にここから動かないでくださいね』

「でも…」

『返事は…!?!』

「は、はい…!」

セアヴィラが振り返って言うと、エステリーゼは仕方なしに了承する。それを確認すると、セアヴィラは真っ先に足を怪我してるであろう男性の方へ向かった。

「た、助けて…立てなくて…ひっ…！魔物が、魔物が…！」

『直ぐ治療します。…？ファーストエイド?!』

その言葉を紡ぐと、淡い緑の光が男性を包み、みるみる足の傷が治っていく。ふとユーリの方を見れば、彼も女の子を無事に助けたみたいだった。セアヴィラも男性と共に門の中へと避難する。しかしユーリが助けた少女が人形を落としたのだと言う。

『僕が行く』

「あっおい、セアラ…！」

ユーリが駆け出すセアヴィラに手を伸ばすが、その手は空を切った。セアヴィラは急いで人形のある場所と向かい、それを拾い上げると目の前まで迫っている魔物の群れを見て顔をひきつらせる。

『やつば…!』

「セアラ!…!」

『うわわわっ!…!』

慌てて踵を返して門へと走り、そしてギリギリのところまで砦内へ滑り込んだ。背後で魔物が扉にぶつかる音を聞きながら、セアヴィラは起き上がって安堵の息を吐いた。

「お人形〜!お姉ちゃん、ありがとう!」

『いはいえ!もう落としちゃダメだよ〜?』

「うん!」

はい、と人形を少女に渡すと満面の笑みでお礼を言われた。その笑顔にセアヴィラも笑顔で返した。

「…みんなが無事で本当によかった……あ、あれ……」

エステリーゼは安心したのか、力が抜けたようにへたり込んだ。彼女を見てセアヴィラは微笑んだ。

『ちゃんと約束守って下さってありがとうございます』

「あ、いえ…きっとわたしもセアヴィラと同じように飛び出してきたと思いますから」

「ほんとお前は無茶すぎなんだよ。そう言うところは何も変わっちゃねえよな」

『だって僕は僕だし』

セアヴィラはくるっと回ってユーリに向かってニッコリと笑う。そんな彼女に溜め息しか出なかった。

「結界の外って、凶暴な魔物がたくさんいて、こんなに危険だったんですね」

「あんな大群で来られたら結界がほしくなるな」

『ま、あんなに大群も珍しいけどね』

セアヴィラはユーリとエステリーゼの隣に座り込んで話す。

「ここに結界魔導器シルトプラスチックを設置できないんでしょうか？」

「そりゃ、無理だろ。結界は貴重品だ」

『それに今の技術では作り出せないですしね』

「そう、ですよね…魔導器を生み出した古代ゲライオス文明の技術がよみがえればいいのに…」

エステリーゼは言いながら空を見上げる。確かにそれがあれば今では貴重な結界魔導器を作れるかもしれない。しかしセアヴィラは首を振る。

『今の騎士団の現状を考えるとそれは難しいと思いますよ』

「だな。帝国が民衆のためってのはちょっと想像しにくいな」

そうユーリが言った次の瞬間、彼は立ち上がり、セアヴィラはハツとして背を向ける。何事かと、エステリーゼが視線を前に向けると、そこには騎士団の姿があった。

「その三人、少し話を聞かせてもらいたい」

セアヴィラは、やばいなあ、と呟くと腰の銃に手を掛ける。

「だから、なぜに通さんのだ！魔物など俺様がこの拳で、ノックアウトしてやるものを！」

突然、話を遮るように怒鳴る声が聞こえてきて騎士団員はそちらを振り返る。

「簡単に倒せる魔物じゃない！何度言えばわかるんだ！」

「貴様是我々の実力を侮るといふのだな？」

セアヴィラたちも気になったのかそちらに目を向ける。そこには細身の男と難いのいい男がおり、目の前の騎士団員に刃を向けていた。

「邪魔するな！先の仕事で騎士に出し抜かれたうっぶんをここで晴らす！」

どうやら今はこっちより向こうの連中の方に注目がいつてるようだ。しかもこの様子だと門を抜けてハルルへ向かうのは難しいだろう。

「フレンが向かった花の街ハルルはこの先なのに」

「騎士に捕まるのも面倒だ。別の道を探そう」

『それにしても凄く注目されちゃったね…そこまで計算してなかったや…』

セアヴィラは守護役と言う極秘の任に着いている為、一般の団員にはあまり顔は知れてない。しかしセレーネと名乗れば一発で分かかってしまう程、帝都では有名なのだ。

「セアラには目立つなっつっても無駄だからなあ……」

『あれえ？僕よりやる気満々だった人はどこの誰だったかなあ？』

「っ目の前で、魔物に襲われそうになってるやつを放つとけねえだろ」

『それは僕だつて同じだよ？それ、に、僕は出来ないって決めつけてやらないのは大嫌いなんだよね』

知ってるでしょ？、と満面の笑みで言うと、ユーリは溜め息を吐いて苦笑いをした。そんな二人を見てエステリーゼは笑う。

「あ、ごめんなさい。二人ともフレンが話してたとおりの人なんだと思って」

『うえ？フレンが僕とユーリのことを？』

「はい。目の前に困ってる人がいると放っておけないんだ、似た者同士だって、よく言っていました」

「あいつもそうじゃねえか。今度会ったら、お互い様だつてユーリとセアラが言ってたって伝えといてくれ」

確かに彼女たちは似た者同士だ。三人は何をするのも同じだった。しかし実際そうなのだから、言われて悪い気はしない。

「ねえ、あなたたち。私の下で働かない？報酬は弾むわよ」

突然後ろから赤髪の女性に話し掛けられたが、ユーリは知らんぷりする。セアヴィラもそれにつられて見ぬ振りをした。すると部下である男性が彼女たちに、失礼だぞ、と文句を言う。

「名乗りもせずに金で釣るのは失礼って言わないんだな。いや、勉強になったわ」

『まるで賤がなっていないよねえ』

「おまえら！」

セアヴィラとユーリの言い様に部下の男は突っかかるようにする。それを女性が手で制した。

「予想通り面白い子たちね。私はギルド？幸福の市場？のカウフマギルド・ド・マルシェンよ。商売から流通までを仕切らせてもらってるわ」

「ふうん、ギルドね…」

ユーリが呟いた瞬間、地面が揺れた。収まるのを待ってから、カウフマンが話し始める。

「私、今、困ってるのよ。この地響きの元凶のせいだ」

「あんま想像したくねえけど、これって魔物の仕業なのか？」

「ええ、平原の主のね」

『ああ、あのでっかいやつね』

知ってるのか、とユーリはセアヴィラを振り向く。セアヴィラは何度かあの大群を目の当たりにしたことがあるのだ。

「あの、どこか別の道から、平原を越えられませんか？先を急いでるんです」

「さあ？平原の主が去るのを待つしかないんじゃない？」

す、とセアヴィラは目を細めて、カウフマンの態度に違和感を持つ。それはユーリも同じだった。きっと彼女は抜け道を知ってるのだろう。

「焦っても仕方ねえってわけだ」

「待つてなんていられません。わたし、他の人にも聞いてきます！」

いてもたってもいられなかったのか、エステリーゼは駆け出し、それをラピードが追う。セアヴィラはユーリと顔を見合わせて溜め息を吐いた。

「流通まで取り仕切ってるのに別の道、ほんとに知らないの？」

「主さえ去れば、あなたたちを雇って強行突破って作戦があるけど、協力する気は…なさそうね」

「護衛がほしいなら、騎士に頼んでくれ」

「冗談はやめてよね。私は帝国の市民権を捨てたギルドの人間よ？」

自分で生きるって決めて帝国から飛び出したのに今さら助けてくれはないでしょ。当然、騎士団だって、ギルドの護衛なんてしないわ」

カウフマンの話にも一理ある。何年も騎士団にいるセアヴィラだったが、ギルドの頼みを聞いたと言う一例はない。

「へえ、自分で決めたことはちゃんと筋を通すんだな」

「そのくらいの根性がなきゃギルドなんてやってらんないわ」

「なら、その根性で平原の主もなんとかしてくれ。行くぞ、セアラ」

『あ、うん』

呼ばれたセアヴィラは慌ててユーリを追いかける。しかし、途中でピタリ、と足を止め、カウフマンを振り返った。彼女は首を傾げてセアヴィラを見る。

『クオイの森』

「！」

『今思い出した。あなたたちはそこを通らない。勿論、僕も通ったことはない。あそこは、呪いの森だから』

「…ふふ、察しのいい子は好きよ。それより良く知ってるわね、あなた」

カウフマンに向かって、セアヴィラはにっこりと笑顔を見せる。そしてそれ以上はなにも言わず、セアヴィラは向こうで待っているユーリの元へ駆け出した。

「セアラ？」

『西のクオイの森。そこからだったら平原に抜けられるよ』

「！ 行ったことあるのか？」

『ううん。けどそこらしか行く道は無いと思う』

そうか、とユーリは少し悩む素振りを見せてから小さく頷いた。二人は視界に映るエステリーゼを振り向く。

「エステル」

彼女は疲れたのか、地面にへたり込んでおり、その傍らにはラピードがいた。ユーリが声を掛けると、エステリーゼは一度こちらを向いて、そっぽを向く。

「…ちよつと、休憩です。魔物が去るまでこんな場所で待たりしませんから」

「あつそ。じゃあ、セアラとふたりつきりで抜け道に行くことにするわ」

『（そつそれはそれで美味しいよユーリ！！）』

「え？わかつたんですか？待ってください！」

ふたりつきりを強調されて無駄にテンションが上がるセアヴィラ。しかしそれを内心に納めてユーリを追った。

「そつ言えばさっきのお姉さん、ギルドの人間だって言ってたな」

「幸福の市場のカウフマンさん、ですな」

『ちよつとユーリ、浮気は許さないよ』

「ちげえよ」

真顔で言うセアヴィラにデコピンを食らわしす。そんな些細なことでも反応されたことが嬉しいのか、彼女は笑顔になった。

「帝国の市民権捨てて、自分たちで自由に生きてる連中か…」

ふとそんなことを呟いたユーリにセアヴィラは首を傾げて、ギルドに興味があるのかと問う。

「いや、興味ってか、ちと珍しくてな」

確かに、とセアヴィラは頷く。

『あのタイプのギルドは珍しいかも』

「ああ。帝都には、騎士の護衛は受けないなんて、肝の据わったギルドの人間いなかったからさ」

「この先も、ギルドの方々に会う機会があるかもしれないね」

「あのお姉さんみたいに、押しの強いのは、ちと勘弁だけどな…ま、セアラと変わんねえか」

『やだなあ、僕はお金なんかで釣らないよ？僕はちゃんと実力でユーリを手に入れるから！』

「それも違えだろ」

満足気にガッツポーズをするセアヴィラに冷静に突っ込むユーリだった。

平原を駆る魔物の群

（ああ、あれはめっさ怖かった…何度見てもあの大群は慣れないや…）

04 静寂なる呪いの森で

呪いの森…

クオイの森はそう呼ばれている

あそこには何かがある

…だからこそ僕も通らなかった

平原へ抜けられるらしいクオイの森。セアヴィラたちはそこにいた。辺りは薄暗く、空気がひんやりとしている。時折聞こえる動物の鳴き声が嫌に耳に響く。

「クオイに踏み入る者、その身に呪い、ふりかかる、と本で読んだことが…」

『通称、呪いの森、ってね』

「成る程、だからセアラは来たことなかったんだな」

『ま、そーゆーこと。呪いなんて信じちゃいないけど……』

セアヴィラはそこまで言う口を閉ざし、何でもないとヒラヒラと手を振った。そんな彼女に疑問を持ちながらも、ユーリは森に足を踏み入れる。セアヴィラとラピードはその後に続くが、惑ってるのかエステリーゼはなかなかその場を動かなかった。

「行かないのか？ま、オレはいいけど、フレンはどうすんの？」

フレンの名を出されたエステリーゼは覚悟を決めたように、行きましょう、と足を進めた。こんなに肝の据わったお姫様は珍しいと思う。彼女のそんなところに、セアヴィラは惹かれたのだろう。

「この森、本当に砦の向こうに抜けられるんですか？」

「抜けられなければ戻りゃいいって」

「…もし呪いでカエルやへびになったりしたら、どうしましょう」

『エステリーゼ様、それは何のお伽噺ですか』

いや、彼女は本気でそう思ってるのだからかもしれない。悪いと思いつつ、セアヴィラは笑いを堪えていた。純粹すぎるのもどろろかと思つ。それはそれで興味深いのだけれど。

「ま、そうしたら、オレが責任もって面倒見てやるよ」

「面倒見る…って…？」

ユーリの言葉に、ピタリ、とセアヴィラは停止する。

「心配するな、子供の頃、カエルもへビも飼ってたことがある。世話の仕方はばっちりだぜ」

「わたし、ユーリがカエルやへビになったら、お世話する自信ありません…よ？」

『ユーリに面倒見てもらえるならいいかも…』

「は？」

ボソツと聞こえたセアヴィラの言葉にユーリが振り返る。彼女は目を輝かせてユーリを見ていた。

『カエルになったらユーリにペタペタくつきまくれるし！へびになつたらユーリに絡み付けられるし！ヤバい！！めっさ至徳じゃん！！』

「安心しろその時は腹をかつ捌いてやるから」

『痛い！！痛いよユーリ！！』

セアヴィラは自分のお腹を押さえて怯える。しかしエステリーゼにはそれが楽しそうにも見えた。そんな彼女は途端に足を止めた。

「何の…音です？」

その言葉にエステリーゼの前にいた二人は気を張り詰める。警戒しながら辺りを見回すが、何の姿も気配も無かった。

「足元がひんやりします…。まさか！これが呪い！？」

「どんな呪いだよ」

「木の下に埋められた死体から、呪いの声がじわじわと這い上がりわたしたちを道連れに…」

「おいおい…」

『流石にそれはないですねえ』

ユーリは過度の妄想に呆れたような態度を取り、セアヴィラは苦笑いしながら数歩足を進める。すると彼女の瞳に倒れた塔のようなものが映る。

『ね、ユーリ。あれ、プラスチック魔導器だよね？』

「ん？…ああ、確かに魔導器だな。なんでこんな場所に…」

やがて、暫く魔導器を見ていたユーリは振り返り、休憩しようとする。
案ずる。

「だ、大丈夫です」

『エステリーゼ様、無理はなさらぬ約束ですよ』

「セアヴィラ…でも…」

『ほら、僕もちょっと疲れましたし、丁度いいじゃない』

言いながらセアヴィラが魔導器の窪みの辺りに近付いたその時だった。

『わっ』

「うわっ」

「きゃあっ」

目映い光が辺りを包んだ。瞬間、ふ、とセアヴィラの意識が途切れ、彼女は地面に倒れ込んだ。それを見たユーリは咄嗟に駆け寄り、セアヴィラの身体を起こす。

「おい、セアラー!!」

「セアヴィラ!」

「っセアラ!」

珍しく、いつも余裕たっぷりのユーリが顔を歪めた。彼はぐったりと倒れ込んでいるセアヴィラの髪をそつと梳いた。

(何だろう…何か、気分悪い…?)

セアヴィラはパツチリと目を覚ます。一番に目に入ったのはユーリの顔。彼女はキョトンとして彼を見詰めていた。

『ユー、リ…?』

「！ 起きたか…大丈夫か？」

『ちよつと、気持ち悪い…ん？あれちよつと待って…何でユーリが僕を見下ろして…おお！？まさか膝枕！？』

「相変わらず元気だな」

ユーリは溜め息を吐いて立ち上がった。セアヴィラは彼の膝の上に乗っけていたため、転がるように膝から落ち、地面に頭をぶつけた。

『あたた…酷いなあ。それより僕、何で寝てたんだっけ…』

「突然倒れたんだよ。何か身に覚えはないか？」

『あー…もしかしたらエアルに酔ったのかも…』

ぶつけた後頭部を擦りながらセアヴィラは言う。

「エアルって魔導器動かす燃料みたいなもんだろ？目には見えないけど、大気中に紛れてるってやつ」

『うん、そのエアル。濃いエアルは人体に悪い影響を与えるんだってさ。』

「ふうん、だとすると呪いの噂ってのはその所為なのかな」

そう言えばエステリーゼ様は？とセアヴィラが聞くとラピードと食べるものを探しに行ったらしい。彼女は元気良くその場で立ち上がった。

「倒れたばっかなんだ。もうちょいゆっくりしとけ」

『エステリーゼ様を放っておけないし、きっと早くフレンに追い付きたいって思ってるし〜』

へらりと笑いながら言つと、いつもより少し低めの声でユーリが話す。

「また倒れて、今度は一晩中起きなかつたらどうすんだよ」

『…もしかして心配してくれてるの？』

「足手まといになるって意味だよ」

『で〜す〜よ〜ね〜』

はあ、と頂垂れたセアヴィラだったが、直ぐにいつもの笑顔になる。それを見たユーリはふいつと彼女から視線を反らす。その時、エステリーゼが腕いっぱいニアの実を抱えて戻って来た。

「！ セアヴィラ！！起きたんですね！大丈夫ですか？」

『ああ、はい。大丈夫です。それよりエステリーゼ様、それは…』

「あ、美味しそうですね？セアヴィラも食べます？」

『…それ、味見しました？』

セアヴィラが聞くとエステリーゼはふるふると首を振った。

『…食べてみます？』

冗談半分で言った言葉だったのだが、エステリーゼは本気にしたら

しくニアの実をひとつ手に取ってそれをかじった。

「……………うっ！…セアヴィラ…！！」

『いやいや食べるって言ったのエステリーゼ様ですよ僕の所為じゃないですってば』

やはり苦かったのか、涙目でこちらをみる彼女に苦笑いをするセアヴィラ。

「はははっ、これで腹ごしらえはやっぱり無理か」

ユーリは落ちているニアの実を拾い上げながら言うと、セアヴィラも賛同する。確かにお腹は減ってるのだが流石にニアの実では食べた気にもならないだろう。

「セアラ、確かお前デイドン砦で食材買ってなかったか？」

『ん？ああ、買った買った！サンドイッチなら簡単に作れるかなって』

「じゃあそれでいつか」

セアヴィラが荷物を取り出すと、ユーリはそれを受け取って中身を確認する。

「ユーリは料理できるんです?」

「城のコックと比べんなよ。下町育ちで勝手に覚えた簡単な料理だから」

言いながらユーリは材料を並べ始めた。セアヴィラは何度か彼の料理を食べたことはあるが、一流のコック並みに美味しかった。

「…フレンが危険なのにユーリもセアヴィラも心配ではないんです?」

「ん? そう見える?」

『そうですねえ…』

聞き返すとエステリーゼは小さく頷いた。辺りに落ちてある木の枝を拾っていたセアヴィラは、あはは、と笑ってユーリを見やる。

『僕たちはフレンのこと、良く知ってますからね』

「だから実際、心配してねえからな。あいつなら自分でなんとかしまつだろっし、あいつを狙ってる連中にはほんと同情するよ」

「え？」

ユーリの言葉にエステリーゼは不思議そうに首を傾げる。

「セアラは兎も角、オレはガキの頃から何やってもフレンには勝てなかったもんな。かけっこだろうが、剣だろうが。その上、余裕かまして、こう言うんだぜ？大丈夫、ユーリ？ってさ」

「羨ましいいな…。わたしには、そういう人、誰もいないから」

「いても口うるさいだけだぞ」

『フレンはお母さんだからね』

セアヴィラは言いながら集めた木の枝に火を灯すと同時にユーリはサンドイツチを完成させた。嬉しそうに、セアヴィラとエステリーゼはそれを頼張った。

やがて食べ終わり、一息ついた一行は再び歩き出した。その途中、ラピードが低く屈み、前方の茂みを睨んで唸り始める。すると、ガサツ、と茂みが揺れた。

「ん？」

「エツグベアめ、か、覚悟！」

少年のような声が聞こえてた後、声の主であろう少年が茂みから飛び出して来た。彼は身の丈ほどの大きな斧を手にとっており、そしてそれを振り回し始める。しかしそれは誰に当たることも無く、見ているユーリは刀を鞘から抜いて少年の斧目掛けて振り上げた。その衝撃で尻餅をついて彼は止まる。

『…何、この子』

「ワフッ」

セアヴィラはユーリの鞆を拾いながら少年を見やると、ラピードが彼を覗き込んでいた。少年は酷く驚き、地面に倒れ込む。

「ボ、ボクなんか食べても、美味しくないし、お腹壊すんだから」

「ガウっ！！」

「ほ、ほほんとに、たたたすけて。ぎゃあああ~~~~！！」

はい、とユーリに鞆を渡しながらセアヴィラは溜め息を吐く。

『死んだふり下手すぎでしょ』

「忙しいガキだな」

怯えている少年にエステリーゼは、大丈夫ですよ、と優しい笑みを浮かべて歩み寄る。それを見た彼は漸く落ち着いたようだった。

「ったく。なにやってんだか」

ユーリは呆れたように言った。

「ボクはカロル・カペル！魔物を狩って世界を渡り歩く、ギルド？魔狩りの剣？の一員さ！」

その後、何故か彼、カロルに自己紹介をされた。いきなりすることにユーリとセアヴィラは顔を見合わせる。

「オレは、ユーリ。それにセアラとエステルと、ラピードだ。んじや、そういつことで」

『あ、もし呼ぶんだったらセアヴィラって呼んでね。そっちが本名だから。じゃ、ばいばーい』

仕方なくそれだけ言ってユーリとセアヴィラは踵を返す。そんなふたりに戸惑うエステリーゼだったが、慌てて追いかけてくる。

「へ？…って、わゝ、待って待って待って！」

言いながらカロルは先に行くユーリたちの前に立ちはだかる。

「君たちは森に入りたくてここに来たんでしょ？なら、ボクが…」

「いえ、わたしたち、森を抜けてここまで来たんです。今から花の街ハルルに行きます」

森を抜けて来たことにカロルは驚くが、直ぐにエツグベアという魔物を見なかったかと聞いてきた。

「セアヴィラ、ユーリ、知ってます？」

「さあ、見てねえと思つぞ」

『いなかっただすねえ』

確かにここまで戦闘は何度もしてきたがエッグベアとは戦つてはいなかつた。それを告げるとカロルは、そっか、と酷く落ち込んだ。

「なら、ボクも街に戻ろうかな……あんまり待たせると、絶対に怒るし……うん、よし！」

自分の中で何かを決心した彼は勢い良く顔を上げる。

「三人だけじゃ心配だから、魔狩りの剣のエースであるボクが街まで一緒に行つてあげるよ」

ほらほら、と自分は魔導器を持つてるからと鞆についてあるそれをアピールするが、三人の腕にある魔導器を見て少しばかり退がる。しかし彼は負けじと、鞆から本を取り出す。ユーリはそれを奪うかのように手に取り、開いた。それには魔物の情報が書かれていたのだが、途中から何も書かれていない白紙だ。それからユーリはちら

りと彼の斧を見やった。

「エースの腕前も剣が折れちゃ披露できねえな」

見れば彼の斧は途中でポツキリと折れており、気付いたカロルはそれを拾い上げて素振りを始める。その隙に一行は森の出口へと向かった。

「ちょ、あ、方向わかってんの？ハルルは森出て北の方だよ。もお、置いてかないでよ〜」

叫ぶのを無視して歩くユーリたちの後を慌てて追いかけるカロルだった。

『結局勝手についてきてるし〜』

セアヴィラは魔物と戦いながらカロルをちらりと見やる。折れた斧で、しかも度胸も無いくせに良く戦うものだ。セアヴィラにとって

嫌いなタイプではないのだが、なんだかやるせなかった。

「ラピードって何者？犬なのに武器使うし、牙とか爪があるのに…」

「ウー、ワン！」

『ん？』

「爪とか牙使うのは犬の戦い方だしな」

戦闘後のふとしたカロルの問いにユーリが答える。その言いようにエステリーゼは驚いたように目を瞬かせる。

「ラピードは犬、ですよね？」

「ワンワン！」

『わっ、ちょ……！』

「ラピードはラピードって生き物だよ」

意味が分からないとカロルは顔を歪める。

「ガウツガウツ、ウォーン！」

『ひゃ、っラピード！』

「…何であれ、こいつは自分のこと犬だと思ってない。だから、武器も使って攻撃するし、道具も使う」

「でもだからと言って自分のことを人間だとも思っていない」

「…よくわからないけど…気位のような感じます」

「ウォーン！」

『あはっ、や、もっっ、くすぐった、いよ、ラピード、ひゃあー！』

「……………って何やってんだよお前ら！」

いい加減、セアヴィラとラピードのじゃれあいに限界を感じたユーリは振り返って叫ぶ。ラピードはセアヴィラの上に乗し、尻尾で彼女の首筋やら脇やらをくすぐっていた。

「おいやめろラピードお願いだからやめてくれ」

「ワフッ」

ユーリは真顔だったが内心はかなり必死だった。ラピードはまるで仕方ないとも言うようにセアヴィラの上からおりる。

「ラピード、なんでセアヴィラにはあんなになついでしょ
うか…」

「さあな」

ユーリは呆れるように息を整えてるセアヴィラを見やった。

「お喋り出来る仲間がいると旅も断然楽しくなるよね」

暫く歩いていると、突然カロルがそんなことを言い出した。

「もう、ひとりのときは、心細く…じゃなくて、退屈でさあ」

「ああ、そうだな。あ、カロル、後ろに魔物が」

誰がどっから聞いても棒読みなはずなのに、カロルはそれを本気にして慌てて飛び退いた。そんな掛け合いを見ていたセアヴィラは苦笑いをする。

『何かユーリ、楽しそうだなあ』

「急に賑やかになりましたね」

「ワン、ワン！」

『あ、あれ出口じゃない？』

そう言ったセアヴィラが指差す方には明るい光が差し込んでいる。やっこのことで森の外に出られたセアヴィラは、うーん、と思いつ

きり背伸びをした。

『よし、ハルルはここから北だったよねえ〜』

「あ、うん、そうだよ!」

そのまま北を向きながらセアヴィラは言う。すると、ふわり、と花びらが目の前を過ぎていく。見覚えのあるそれはハルルの象徴であるハルルの木のもだった。しかしセアヴィラは違和感を覚える。

『…なんでこんなに色褪せてるの…?』

傍に落ちた花びらを一枚拾い上げながらセアヴィラは呟く。ふと彼女の異変に気がついたユーリがそっと声を掛けてくる。

「セアラ、どうかしたか?」

『う、ううん!何でもないよ〜』

「? ならいいけど…」

セアヴィラは花びらをぎゅっと握り、誤魔化すようにいつもの調子に戻る。何だか変な感じはしたのだが、彼女は気にしないことにした。

「そう言えばセアラとユーリって付き合ってるの？」

『うん、良い質問だね。だがその前にその愛称で呼ぶの止めようか』

「うええ！？な、なんでさ！」

セアヴィラは真っ黒な笑みでカロールを見やった。そして真顔で言う。

『ユーリが付けてくれた愛称だから』

「意味分かんないよ！」

『とーにかーくー！セアラって呼び方はユーリだけの特権なの！』

「オレだけって…フレンだって呼んでんだろが」

『た、確かにそうだけど！！』

「じゃあいいじゃん!?!」

『なーんーでーだーよー!?!』

結局カロールからもセアラと呼ばれるようになったセアヴィラ。ぶつぶついいながらもいい加減終わらないので承したのだった。

静寂なる呪いの森で

(ぐすん……ほんと、ユーリって意地悪だよ……ま、そこが大好き
なんだけど!?)

05 花の街の枯れた大樹

ハルルの樹

それはとても幻想的で

美しい、桃色の花をつけていた

北を目指し歩いてきた一行は、やがてハルルへと辿り着く。しかしそこにあつたのは嘗てセアヴィラが見たハルルでは無かった。鮮やかに桃色に色付いていたハルルの樹はまるで命を失ったかのように色褪せていたのだ。

「ここが花の街ハルルなんですよね？」

「うん、そっだよ」

確かにハルルには間違いない。この間まではこんな街じゃなかった

はずだ。そう思いながらセアヴィラはふと樹を見上げる。

「この街、結界ないのか？」

「そんなはずは……」

ふたりは空を見上げて確認する……が、やはり結界はなかった。

「三人ともハルルは初めて？」

『僕は何度か来たことはある。多分ふたりはそうだと思うよ』

「そっか。ならセアラ以外はハルルの樹シルトフラスティアの結界魔導器も知らないんだね」

「樹の結界？」

カロルの言葉にユーリとエステリーゼは街の中心にあるハルルの樹を見上げる。話の最中に視線を戻していたセアヴィラも再び樹を見た。

「？魔導器の中には植物と融合し、有機的特性を身に付けることで進化をするものがある？です。その代表が、花の街ハルルの結界魔導器だと本で読みました」

相変わらず何でも知っている彼女に感心するユーリ。

「で、その自慢の結界はどうしちゃったんだ？」

じっとハルルの樹を見ているセアヴィラにユーリは問い掛ける。彼女はぐるりと街を見渡し、辺りに座り込んでいる街の人たちを見て目を細めた。

『今は起動してないみたいだね…』

「毎年、満開の季節が近付くと一時的に結界が弱くなるんだよ。ちよつと今の季節なんだけど、そこを魔物に襲われて…」

魔物は退治したのだが結界魔導器が壊れてしまったんだそうだ。その所為で樹が徐々に枯れはじめてるらしい。

「あ！」

突然声を上げたカロルに驚いたエステリーゼがどうしたのかと聞くと、彼は用事があったのだとセアヴィラたちから離れて行った。

「勝手に忙しいやつだな」

『ごめん、ユーリ。僕も勝手するよ』

「は？え、ちよ、セアラっ！？ってエステルもかよ！」

セアヴィラは燕尾服の裾を翻して怪我人の治療を始める。それを見たエステリーゼは我もと怪我人の元へと走っていく。

『大丈夫ですか？今、治療致します』

「！ あ、あの、ですが…私たちには…」

『お気になさらないで下さい。これは僕の好意ですので』

そうセアヴィラは柔らかく笑って治療を始める。そのまま次々と怪我人を治して行くセアヴィラとエステリーゼ。ユーリはそんなふたりを黙って見ていた。

「すごい…痛みがなくなった。あ、ありがとうございます。本当にありがとうございます」

「いえ、そんな、全然…」

『お怪我、大したことなくて良かったです』

全ての怪我人の治療を終えたふたりに感謝の言葉の雨が止めどなく降っていた。

「いやはや、これほどの治療術があったなんて…なんとお礼を言え
ばいいのか」

「いえ、本当にいいですから」

『僕たちは僕たちに出来ることをしただけですから、気にしないで

下さい』

「謙虚なお嬢さん方だ。騎士団の方々にも見習ってほしいものです」

一人の老人の言葉に賛同する言葉が飛び交う。それを聞いたセアヴィラは顔をしかめる。

本当に騎士団は帝国のことしか考えてないのだろうか。…いや、この現状を見る限りそうなんだろう。そんな騎士団だからこそユーリは退団し、セアヴィラもまた、辞めてしまおうと思ってしまうのだ。

「まあ、帝国の方々には私らがどうなるうと関係ないんでしょうな」

「うそ…そんなはずは…」

『…エステリーゼ様は知らないでしょうがこれが騎士団の現状なんです…』

耳打ちでこつそりと話すと彼女はバツとセアヴィラを振り向く。セアヴィラの表情は凄く悲しいもので、エステリーゼでもさっきの言葉が本当なのだと分かった。

「あ、でも、あの騎士様だけは違っていましたよね？」

「おお、あの青年か。彼がいなければ、今頃私らは全滅でしたわ」

彼らの言葉にセアヴィラとエステリーゼはもしかして、と顔を見合
わせる。

「今年は結界の弱まる時期が早く、護衛を依頼したギルドが来る前
に襲われてしまいましたな。偶然、街に滞在していた巡礼の騎士様
ご一行が魔物を退けて下さったのです」

ユーリがその話を詳しく聞けば、その騎士はやはりフレンのようだ
った。エステリーゼは老人の元へ駆け寄り、まだ街にいるのかと問
う。しかし彼らは結界を直す魔導士を探す、と当にこの街を去った
らしい。

「行き先まではわからないか」

「東の方へ向かったようですが、それ以上のことは……」

『東、ね…』

「そうですね…でも、ここで待っていればフレンは戻ってくるんですね」

「よかったな。追いついて」

会うまでは安心できませんけど、とエステリーゼは苦笑いする。

「ハルルの樹でも見に行こうぜ。セアラもエステルも見たいだろ？」

「あ、はい！」

『そう、だね…』

なんだか乗り気じゃないセアヴィラは坂の上にある樹を見詰める。願わくば満開に咲いたハルルの樹をふたりに見せたかった。彼女は思いながらもユーリを追う。

『あれ、あそこにいるのカロルじゃない？』

「あ、ホントですね」

ハルルの樹に向かう途中、つり橋の上にカロルの姿を見つけた一行は彼の方へ歩み寄る。

「満開に咲くハルルの花…。見せてあげたかったのに。そうすれば、きつと…」

何やらぶつぶつ呟いているカロルに声を掛けるがこちらには気付かないらしく、未だに何かを言っている。そんな彼を見たユーリはひとりにしてやろうと来た道を戻り出した。しかしふと足を止める。セアヴィラがひょいっとユーリの後ろから覗くと、目の前には三人の子供。彼らは魔物を倒すんだと意気込んでいた。

「あんな子どもまで…。早く、結界が戻ればいいのに」

ユーリは頷いて再びハルルの樹を目指して歩き始める。さっきの子供たちを気にしながらもセアヴィラとエステリーゼはユーリの後に続いた。

「近くで見るとほんと、でっけ〜」

ハルルの樹の下へ来たセアヴィラたちは聳え立つそれを見上げる。

「もうすぐ花が咲く季節なんですよね」

「どうせなら、花が咲いてるところ見てみたかったな」

『満開のハルルの樹は何よりも綺麗だよ』

「きっとそうでしょうね…満開の花が咲いて街を守ってるなんて素敵です」

確かにハルルみたいな場所はそうそうないだろう。樹が街を守ってる姿は凄く幻想的だ。セアヴィラはもう一度、その姿を見てみたいと思った。

「わたし、フレンが戻るまで怪我人の治療を続けます」

「なら、どうせ治すんなら、結界の方にしないか？」

「え？」

唐突なユーリの提案にエステリーゼは驚いたように振り向く。するとセアヴィラは考えるように顎に手をやり、やがて顔を上げる。

『…そうだね。うん、それが良いよ！流石ユーリ！！』

「え、えっ？」

セアヴィラは嬉しそうに跳び跳ねる。しかしエステリーゼはユーリとセアヴィラを交互に見て戸惑っていた。

「魔物が来れば、また怪我人が出るんだ。今度はさっきのガキたちが大怪我するかもしれねえ」

『簡単に言えば僕もユーリもこのまま見過ごせないってこと』

「それはそうですけど、どうやって結界を？」

エステリーゼの言葉に、一度樹の根元に目をやって、なぞるように

上まで見上げるユーリ。

「こんなでかい樹だ。魔物に襲われた程度で枯れたりしないだろ」

『そう…別に他の理由がある、ってことですよ』

言いながら数歩、樹に近づく。見た目には何の変徹もないのだが、どこかに元凶があるはずだ。彼女がふと違和感を感じて地面に目を向けた時、先程の老人が何をしているのかと尋ねてきた。直ぐにエステリーゼが樹が枯れた原因を調べてると答えるが、老人によるとそれはフレンにも分からなかったと言う。

そんな中、坂を登ってきたカロールにエステリーゼが声をかける。

「あ、カロール！カロールも手伝ってください！」

「…なにやってんの？」

尋ねるカロールに先程のことを話せば、カロールはハルルの樹が枯れた理由を知っていると話す。それには彼が森で探していたエッグベアが関係しているらしいのだ。

「どづいうことだ？」

「土をよく見て。変色してるでしょ？」

言われてセアヴィラたちは地面に目をやる。確かに土は酷く変色しておかしかった。

「それ、街を襲った魔物の血を土が吸っちゃってるんだ。その血が毒になってハルルの樹を枯らしてるの」

『魔物の血…』

「その毒をなんとか出来る都合のいいもんはないのか？」

ユーリが聞くと今までもそうだったのか、語尾が消えてしまいそうなくらいに、誰も信じてくれないよとカロルは話す。

「なんだよ、言ってみなって」

まるで子供（実際子供なのだが）を宥めるように、カロルの目線に合わせるユーリ。

「パナシーアボトルがあれば、治せると思うんだ」

彼は顔を上げて呟くようにそう言った。

「パナシーアボトルか。よろず屋にあればいいけど」

「行きましょう、セアヴィラ、ユーリ！」

エステリーゼはいち早くその場から駆け出す。ふたりは顔を見合わせてから彼女を追った。

坂を下りたつり橋の向こうによろず屋がある。しかしパナシーアボトルは売り切れており、エステリーゼは頂垂れた。そんな彼女を見かねたセアヴィラが店の主人に問う。

『確か、素材があつたら合成出来るんだつたよね』

「おお、良く知ってるね、お嬢さん」

「何があれば作れる？」

パナシアポトルを作るには、エッグベアの爪、ニアの実、ルルリエの花びらの3つが必要だ。ニアの実は森でエステリーゼが拾ってきた大量の果実。

「エッグベアは？」

『僕は本でならなるとなーく見たことありますが詳しくは分かりません』

店の主人によると魔物狩りを生業にしている魔狩りの剣の人間がいればわかるらしい。その瞬間、頭にはカロルのことが浮かんだ。

「あいつ、そのために森にいたのか…」

『エッグベア覚悟とかも叫んでたし間違いないね』

言いながらちらりと後ろを見やると、物陰に隠れるカロルの姿が見え、セアヴィラは小さく笑う。

（ちょっと見直したかなあ〜）

次にルルリエの花びらのことを聞くと、それはハルルの樹の花びらのことだと分かった。普段はルルリエの花びらではなく魔導樹脂を使うのだが、この辺りにはないらしい。

『う〜ん…でもこの花びらじゃ使えないしなあ…』

セアヴィラは拾った花びらを指先でくると回しながら言つと、もしかしたら長が持つてるかも、と店主が教えてくれた。一行はお礼を言つてからよろず屋を後にする。

そこから少し歩いたつり橋の近くにカロルの姿を見つけ、セアヴィラは足取り軽く彼に近付く。

『カーロル!』

「! セアラ…」

『なーに悄気てんのさ! ほくら、さっさとクオイの森に行くよ!』

「え?」

その言葉に目を丸くするカロル。軽く屈んで、バシバシ、と背中を叩くと彼は恐る恐るセアヴィラを見やった。

「パナシーアボトルで治るって信じてくれるの…?」

「嘘ついてんのか?」

カロルは首を振る。そんな事を聞かなくてもユーリもセアヴィラもエステリーゼも、彼が嘘をついてるだなんて思ってなかった。彼の目は真っ直ぐだったから。

「だったら、オレたちはおまえの言葉に賭けるよ」

「ユーリ…も、もう、しょうがないな。ボクも忙しいんだけどね」

照れるカロルの頭をセアヴィラが優しくな笑みを浮かべながら、ポンポン、と叩くと彼は真っ赤になった。

「決まりですね！わたしたちで結界を直しましょう」

「エステルも来るの？」

カロルが聞くと当たり前前な顔で当たり前じゃないですかとエステルは言う。

「フレン待たなくていいのかよ」

「治すなら樹を治せって言ったのはユーリですよ」

「なら、フレンが戻る前に樹治して、びびらせてやるっぜ」

にっこりと笑ったエステリーゼにつられてセアヴィラも笑顔になった。

一行は長、先程の老人にルルリエの花びらを貰った後、再びクオイの森に足を踏み入れる。

「ねえ、疑問に思ってたんだけど、三人：ラピードもんだけど、なんで魔導器持ってるの？普通、ポデーブラステイア武醒魔導器なんて貴重品、持ってないはずんだけどな」

突然、前を歩いていたカロルが振り返ってそんなことを聞く。ユーリは顔をしかめてカロルを見る。

「カロルも持ってんじゃん」

「ボクはギルドに所属してるし、手に入れる機会はあるんだよ。魔導器発掘が専門のギルド、？ルインズゲート遺構の門？のおかげで出物も増えたしね」

へえ、とユーリは感心したように呟く。

「遺跡から魔導器掘り出ししてるギルドまであんのか」

確かにそうでもしないと帝国が牛耳る魔導器を個人で入手することは不可能。それに古代文明の遺産である魔導器は、有用性と共に危険性を持つため、帝国が管理をしているのだ。

「魔導器があれば危険な魔術を、誰でも使えるようになりますから、無理もないことだと思います」

「やりすぎて独占になってるけどな」

『あはは、そりゃごもつともな意見だねえ。あれは僕にもどうにも出来ない問題だわ…』

騎士団の中では、地位は誰よりも上かもしれない。しかし守護役ガーディアンと
言う役職上の決まりで騎士団の内情には文句を言えないことになっている。あくまで名目は皇族であるエステリーゼを守ることなのだから。

「で、実際のとこどうなの？なんで、持ってるの？」

「オレ、昔騎士団にいたから、やめた饒別にもらったの。ラピードのは、前のご主人様の形見だ」

「饒別って、それ盗品なんじゃ。…えと、エステルは？」

「あ、わたしは…」

カロルはユーリのことにはあまり触れず、次にエステリーゼに聞く。しかし本当のことは言えるはずもなく、彼女は戸惑う。

「貴族のお嬢様なんだから魔導器ぐらい持ってるって」

「あ、やっぱり貴族なんだ。ユーリと違って、エステルには品があるもんね。じゃあセアラも貴族？」

ユーリのフォローにほっとしたセアラはいつもの調子で答える。

『まあそんな感じ？でもこの魔導器は僕が騎士団員だから持っているだよ』

「きつ騎士団員！？嘘っ！？セアラが!？」

飛び退く勢いでカロルは驚く。確かに彼女は見た目も中身も騎士団とは程遠い。故に自分や知っている周りの人から騎士団員だと言わないとわからないのだ。

「…でもセアラって他の騎士団とは全然違うよね…何て言うか…自由？」

『そりゃそ〜だよ。僕、騎士団嫌いだし』

「じゃ、何で騎士団なんかにいるのさ」

カロルの言葉にセアヴィラはユーリとエステリーゼを交互に見やる。そして目を瞑って細く長く息を吐いたセアヴィラは、真っ直ぐに前を見据えた。

『……守りたい人がいるから』

「！」

珍しく真剣な表情のセアヴィラにみんなは目を丸くする。しかし彼女は直ぐにへらりと笑った。

『理由なんてそれだけで十分だよ』

「…そつか。なんかセアラらしいね!」

そつかなあ、とセアヴィラは照れるように頬を掻く。

『んじゃま、時間も惜しいし、そろそろ行きますか』

セアヴィラは元気良く足を進める。そんな彼女の背中をじっと見て、ユーリは小さく笑ってからゆっくりと後を追った。

やがて、この間エステリーゼが大量に持ってきた、ニアの実が落ちていた場所に着いた。ユーリはそれを拾い上げる。

「あとは、エッグベアの爪、だね」

「森の中を歩いて、エッグベアを探すんです?」

「それじゃ見つからないよ」

「なら、どうすんだ?」

するとカロルはニアの実を一つ手にとり、エッグベアの解説をしていく。エッグベアはかなり変わった嗅覚の持ち主なんだそうだ。そして突然ニアの実を燃やした瞬間、とてつもない異臭が嗅覚を襲った。

「くさっ!!!おまえ、くさっ!」

『カロルくっさ!』

その臭いにセアヴィラとラピードは咄嗟にその場から離れる。嗅覚が優れているふたりにとってその臭いは耐えられそうになかった。

「ちよ、ボクが臭いみたいに!」

カロールがユーリ立ちに近付くが、やはり近くで匂ぐのが嫌なのか、ふたりは後退りする。

「先に言っておいて下さい」

『ラピード…僕、お花畑がみえ、るよ…』

「クウ〜ン…」

セアヴィラとラピードは限界に達したのか地面に倒れ込んだ。慌ててエステリーゼが駆け寄り、内心、ユーリも慌てながらセアヴィラの傍にしゃがみこむ。

「みんな警戒してね！いつ飛び出してきたもいいように。それにエツグベアは凶暴なことでも有名だから」

「その凶暴な魔物の相手はカロール先生がやってくれるわけ？」

臭さに悶えているセアヴィラの頭に手を乗せながらユーリはカロールを見やった。彼は振り返って当然だと胸を張る。…でもユーリも手

伝ってよ、と言う彼は、やはりどこか頼りなく感じた。

「わたしもお手伝いします。ほら、セアヴィラとラピードも」

『僕マジ無理ですどうにかなっちゃいそう』

本気で今にも意識が飛んでいきそうなセアヴィラ。鼻を摘まんで唸っている、ユーリは溜め息を吐いてセアヴィラを肩に担いだ。

「仕方ねえから担いでってやる」

『ユーリ……どうせならお姫様抱っこがい……あだっ!?!』

「放って行くぞ」

『しめんなさい』

調子に乗って言うつと地面に落とされたセアヴィラ。素直に謝ると、ユーリは屈んで背を向ける。セアヴィラはきょとんとしたが、直ぐに嬉しそうに彼の背に飛び乗った。

花の街の枯れた大樹

(はっつ！！…ああダメだ本気で鼻曲がる…後で絶対にぶっ叩いてやる…)

(ユーリ…死にそう)

(そうか)

(死ぬ前に結婚して)

(落とすぞ)

(ごめんなさい)

(…なに、あれ)

(…さあ…)

(クウーン)

06 満開に咲く桃色の花

ひらひらと舞い散り

ひとつの街を包み込む

桃色の花びら

あれから一行は警戒しながら森の中を歩いてきた。相変わらずセア
ヴィラは鼻を摘まんでユーリの背に乗っている。セアヴィラは幼い
頃から嗅覚、聴覚、視覚、味覚、触覚：つまり五感が人一倍優れて
いるのだ。嗅覚と聴覚は犬であるラピードより良いのではないかと
言われている。

「大丈夫か、セアラ？」

『うん…カロールが臭い…頭ガンガンする…』

「だーから！ごめんってば！」

未だに臭う異臭にセアヴィラが唸る。次の瞬間、低い唸り声が周囲に響いた。

「…セアラか？」

『ちがうよ！』

思わず突っ込んでしまったセアヴィラはハツとして、まさか僕が突っ込むなんて、と額に手をやった。そして彼女は気合いで意識をはつきりとさせ、ユーリの背中から降りる。

『エツグベアかな…』

茂みを見て呟くとガサツと音を立てた。カロールは咄嗟にセアヴィラの後ろに隠れる。

「き、気をつけて、ほ、本当に凶暴だから…！」

「そう言ってる張本人が、真っ先に隠れるなんて、いいご身分だな」

『さっきといい今といい…』

「エ、エースの見せ場は最後なの！」

呆れるユーリとセアヴィラにカロルは慌てて弁解をする。溜め息を吐いたふたりは再び茂みに目を向ける。すると出てきたのは小さなプチプリだった。

「…これは、違いますよね？」

直後、その後ろからエッグベアが姿を表す。それを見たカロルは大声を上げる。

「…これがエッグベア…？」

カロルは勢い良く首を縦に振る。

『わ〜本で見たのと一緒にだ〜』

「成る程、カロル先生の鼻曲がり大作戦は成功ってわけか」

「へ、変な名前、勝手につけないでよ！」

『実際僕は鼻曲がったよカロル先生』

ユーリとセアヴィラが武器を構えると、エッグベアは殺気を出して襲い掛かってきた。

「うわああー！」

『?フレアショット?!?!』

セアヴィラが双銃から交互に放った銃弾が命中し、エッグベアは爆発の勢いで後退する。

『何やってんの、早く構えて!』

「う、うん!」

叱られたカロルはもたもたしながらも鞆から武器である斧を取り出す。それを確認したセアヴィラは直ぐにその場を飛び出した。

『エステリーゼ様、援護をお願いします!』

「! はい!」

肩越しに言うとエステリーゼは詠唱を始める。ふ、と突然セアヴィラの上に影が落ちた。しかし直ぐに反応した彼女は咄嗟に後方に飛び上がる。同時にエステリーゼの詠唱が終わった。

「刃に宿れ、更なる力よ...? シャープネス?!」

『貫け!?! ガトリングバレット?!?!』

セアヴィラはそのまま宙で回転しながら銃弾をエッグベアに打ち込む。その隙にユーリとカロルが攻める。

「？三散華?!?!」

「？臥龍アツパー?!?!」

彼らの攻撃は効いてるのだが、エッグベアは身体を大きく回し、ユーリとカロルを振り払う。

「！ エステリーゼ様!?!」

「きゃ…!?!」

エッグベアはそのままエステリーゼに向かっていく。セアヴィラは勢い良く走りだし、エッグベアを回し蹴りで吹っ飛ばす。しかし着地の際に足を捻ってしまった。

『…』

「っんの、バカ！」

それを見たユーリは自分の剣をエッグベアに向けて投げ、それは深々とそいつの腕に突き刺さった。セアヴィラはそれを見逃さず、銃弾を打ち込み、足を引き摺りながらその場を離れる。

『カロール！詠唱の時間稼いで！』

「ボ、ボクが！？」

『今君以外誰がいるって！？』

言い終えるや否や、セアヴィラは詠唱を始める。そんな中、ウルフとアックスピークが飛び出して来た。ハツとした彼女がそちらを振り向くと、そこにはエステリーゼが魔物と向き合っている姿。

『エステリーゼ様！！』

「ごちらは任せて下さい、セアヴィラ！」

『っ…！…分かりました！』

彼女が戦うと決めたならば止める権利はない。それが守護役である
セアヴィラのモットーでもあった。

セアヴィラは再び詠唱に移る。その間にユーリはエッグベアの腕から剣を引き抜き、カロールと共に戦っていた。

『大地の咆哮、それは怒れる地竜の双牙！？グランドダツシャー？
！！』

やがて詠唱を終えたセアヴィラは双銃から放たれた銃弾がエッグベアの真下の地に命中する。そこに魔法陣が展開し、地面から出た鋭利な岩がエッグベアを襲う。

『ユーリ！！』

「ああ！」

ユーリに向かって叫ぶと、彼は剣を握り直し、エッグベアにとどめ

を刺す。エッグベアは地鳴りを立てて倒れ、絶命した。さらにエステリーゼもラピードと共同し、ようやく魔物を倒し終える。

『さっすがユー…』

「お前バカか」

『あいたっ』

振り返ったユーリは突然セアヴィラの頭をぶつ叩いた。セアヴィラは叩かれた部分を擦りながらへらりと笑う。その笑顔を見たユーリは仕方無さげに溜め息を吐いた。

「まったく…さっさと足、治せよ」

『はい』

セアヴィラは捻ったであろう足に手を翳して治療していく。そんな彼女をエステリーゼはじっと見て考えていた。何故自分の治癒術は彼女に効かなかったのか。しかもまるで拒絶されたようにセアヴィラの体調が悪くなった。

『大丈夫ですか、エステリーゼ様？』

「え、あ、はい！」

『なら良かったです』

言いながら倒れたエッグベアに近付く。

『カロールセンサー、これどーやって取るの？取ってよ』

「え！？だ、誰でもできるよ。すぐ剥がれるから」

弱腰のカロールに対して溜め息を吐いてからセアヴィラはしゃがみこむ。それを見たエステリーゼが、自分も手伝わせて、と言ってきた。しかし倒したエッグベアを見て気持ち悪くなったらしく、慌てて口元を押さえる。

「エステルは周囲の警戒な」

「は、はい」

どうやって取るのかなあ、とセアヴィラが奮闘してる中、もう動かないよね、と恐る恐るエッグベアに近づくカロル。その後ろにユーリがこっそりと回る。

「うわあああっ!」

「ぎゃあああ~~~~~っ!」

セアヴィラが何事かと振り向けば、どうやらユーリがカロルを驚かせていたようだった。寧ろセアヴィラはユーリよりカロルの声に驚いたのだが。

「驚いたフリが上手いなあ、カロル先生は」

「あ、うっ…はっはは……そ、そう?あ、ははは…」

当たり前フリじゃなくて素なんだろうなあなんて思いながらセアヴィラがエッグベアの爪弄っているといつの間にかそれは剥ぎ取れていた。

『お、取れてた』

「んじゃ、戻ろうぜ」

そして一行は再び森の出口へ向かって歩き出した。

「ユーリ・ローウェル！森に入ったのはわかっている！素直にお縄につけい！」

森の出口に差し掛かった時、聞き覚えのある叫び声が聞こえてきた。セアヴィラとユーリは顔を見合わせてお互い嫌な顔をする。

「この声、冗談だろ。ルブランのやつ、結界の外まで追って来やがったのか」

『あいつ、しつこさだけは一丁前だからね』

「え、なに？誰かに追われてんの？」

興味津々気にカロールが問い掛けてくる。ユーリは肩越しに彼を振り返りながら、騎士団に追われていると話した。

「またまた、元騎士と現騎士が騎士団になんて…」

彼は笑って言うが、ユーリもセアヴィラも呆れたように苦笑いしながら顔を合わせた。それを見てカロールはさっきのユーリの言葉が本当のことだと悟る。

「…ねえ、何したの？器物破損？詐欺？密輸？ドロボウ？人殺し？火付け？」

「脱獄だけだと思っただけ…ま、とりあえず逃げようぜ」

『あ、ちよつと待って！』

森から出ようと一歩踏み出したとき、セアヴィラが辺りの茂みをかき集め始めた。

「何してるんです?」

『ちよつとでも足止めになるように、です』

「だ、だめですよ!無関係な人にも迷惑になります!」

「誰も通りやしないよ。なんせ、呪いの森だからな」

確かに、とエステリーゼは呟く。やがてこの先に道なんてないという程に茂みを集め終わったセアヴィラは満足げに微笑んだ。

『んじゃ戻ろうか』

それから森を出て、やっとハルルへと戻ってきた一行。直ぐ様よろず屋でパナシーアボトルを合成し、いまは樹の元に来ていた。

「カロル、任せた。面倒なのは苦手だね」

「え?いいの?じゃあ、ボクがやるね!」

カロルは嬉しそうにハルルの樹の根本に向かって行く。それを微笑ましく、エステリーゼは見ていた。

「カロル、誰かにハルルの花を見せたかったんですね？」

「たぶんな。ま、手遅れでなきゃいいけど」

『…そうだね』

そうセアヴィラが呟いた直後、淡い光が辺りを照らし、視線が一斉にそちらに向けられる。村人たちは祈るようにその光を見ていた。

しかし、その光は期待を裏切るように消えていく。やっぱり、とセアヴィラはハルルの樹を見上げて思った。市販のもので簡単に治せるわけではない、と。

『（期待はしていたんだけど）…!?!?』

不意に頭が揺らいだ。

「うそ、量が足りなかったの？それともこの方法じゃ……」

「もう一度、パナシーアボトルを！」

訴えるようにエステリーゼが言うが、ルルリエの花びらはもう残ってはいない。パナシーアボトルは作れないのだ。

『……もう一度、美しき大樹よ……』

ぼつり、とユーリの隣でそんな声が聞こえた。ユーリとエステリーゼはふとそちらに視線を向ける。そこにはいつもは透き通った翡翠の瞳が虚ろになったセアヴィラの姿。

「セアラ……？」

『…逆流……』

不意にセアヴィラの体が輝き出す。誰もがその光景に息を飲む。刹

那、彼女は腰から銃を抜いてエステリーゼに向け、撃った。突
然のことに誰も反応は出来ず、その弾はエステリーゼに直撃し、彼
女は地面に倒れ込んだ。

「エステル!!」

『…相反する力とは言えど、満月と新月は表裏一体のもの』

「セアラ、さつきから何を言って…」

『え、あ…何、僕は…いま何を……っ、エステリーゼ、様…』

ユーリに触れられたセアヴィラはハツとし、何をしたか分からない
とでもいう素振りを見せる。しかしその瞳は僅かに揺らいであり、
自分がしたことを理解しているようだった。

「ちょっと、エステル!」

「…あ、あれ?…大丈夫、みたいです」

駆け寄ったカロールがエステルに声を掛けると、彼女は何も無かった
かのように立ち上がる。それを見たセアヴィラの体から一気に力が

抜けた。

「セアラ！」

『…………』

慌ててユーリが支えようと、その身体が震えているのが分かった。こんな彼女を見るのはいつ以来だろうか。そんな二人を見ていたエステルが何かを感じた。

「…もしかして」

「え、何…？」

次につい、と樹を見上げた。そして彼女は祈るように手を組む。

「お願い…」

そう呟いたエステリーゼから淡い光が発光する。

「エステル」

『エ、ステリーゼ、様…』

それは聖女のように清廉で、全てを包み込むような暖かな光を纏っている。エステリーゼは想いを込めて次の言葉を紡ぐ。

「咲いて」

瞬間、彼女から光が放たれ、幹を伝って樹の天辺で弾けた。そこからは雪のように光が舞い降り、そして…

『色褪せていた、ハルルの樹から…命を感じる…』

光が街を包み込む。それは急速に木々の成長を早め、ハルルの樹さえも命を吹き返した。それに伴い、街の結界魔導器が発動された。

ふわり、ふわりと花びらが舞う。踊るように落ちてくるひとつは、セアヴィラの手のひらに救われた。それを見てから、満開になったハルルの樹を見上げる。その姿は今まで見た何よりも美しく、そして何よりも壮観であった。

「…すげえな、エステル。立てるか？」

「あ、はい」

自分でも何をしたか分からないエステリーゼ。立ち上がったからも、不思議そうにハルルの樹を見詰めていた。

「フレンのやつ、戻ってきたら、花が咲いてて、ビックリだろうな。…ざまあみる」

『そつだ、ね……っ！？』

ドクン、と心臓が一段と跳ねた気がした。そして再びあの感覚が襲ってくる。身体の中を何かが這いずり回っているような、掻き乱されるような、あの感覚が。

『あ、……は……っく……っ』

「セアラ……？」

セアヴィラの異常にエステリーゼと話していたユーリがいち早く気付く。そつと顔を覗き込むと、彼女は真っ青な顔で冷や汗を垂らしていた。

「おい、しっかりしろセアラ！」

『大、丈夫……っ。あは……心配、してくれ、てる……んだあ……。嬉、しいな……』

えへへ、と無理矢理笑って見るがユーリの表情は変わらなかった。彼はそんな彼女を見ていらなかったのかふわり、と横抱きにした。

『え、ちょ……え？』

「気分悪いんだろ？じゃ、大人しくしてろ」

『あ……うん、ごめん、ね……』

いつもなら嬉しすぎてテンションが可笑しくなるんだけど、いまはそれどころではなくて。何だか妙にユーリの体温が心地よくてセアヴィラの意識は闇の底に堕ちていった。

彼女は夢を見た。怖い、夢。それは昔、まだ幼かった頃。ユーリを危険な目に遇わせてしまったこと。

『また、か……』

原因のひとつはセアヴィラの力が暴走してしまったことにあった。しかし彼女はその力を知らない。故に無意識に力を抑え込んでいたのだ。原因が分からなかったセアヴィラは自分が弱かった為に、ユ

ーリを命の危機にさらしてしまった。そう思い込み、セアヴィラは一度二人から離れた。だから彼女は強くなりたいと願い、騎士団の門を叩いた。

ほんとは凄く繊細で傷付きやすい彼女が、何故いつも気丈に振る舞っているのか。それは過去の記憶にあった。もう二度と大切な人に傷付いて欲しくない。だから自分が守るんだ、と。

傷付くのは自分だけでいい。ずっとそんなことばかり考えていた。だからあの時、ザギの攻撃からユーリを守った。いや、長年の条件反射というやつなのだろう。気付いたら彼らの間に立っていたのだから。

『……さーて、行きますか!』

突然、元気に飛び起きて見れば、茫然としているユーリたちの顔が目に入った。辺りはまだ暗いため、少ししか時間が経ってないことが分かった。

「行きますか、ってお前、身体は……」

「そ、そうですね！この間だってさっきみたいに苦しそうにしてたじゃないですか！」

『ユーリの愛で治った。あと寝たから』

「なんて単純な……」

セアヴィラの発言ひとつで緊迫した空気が軽くなった。みんながどれだけ心配してくれたか分かる。だからこそこれ以上心配させたくなくて気丈に振る舞うセアヴィラ。

『ってかハルルから出ちゃったんだね。もう少し見ていたかったんだけどなあ』

「悪いな。城で会ったあいつ……ザギの姿を目にしたから早めに街を出ようってことになったんだ」

『あああの痛い奴ね。どうせならばっ殺……一発銃弾ぶちこみたかったよ〜』

爽やかな笑顔で言うセアヴィラにカロルは恐怖を覚えたとかなんとか。そう言うってからボサボサになった緑の髪を手櫛で整えて立ち上がった。

『とりあえず街からどのくらい離れた？ってかなんでカロールが着いてきてんのさ。まあいいけど。で、東に向かうの？』

「いつぺんに聞いてくんな。…まああれから直ぐに街を出たからそんなには離れてねえと思う。カロールは…まあ成り行きだ。行き先は東だな。東にあるアスピオって街を目指す」

『小言を言いながらも答えてくれるユーリが大好きです！』

「分かった分かった」

相変わらずのセアヴィラのテンションに、少し安堵の色を顔に浮かべるユーリ。そんな様子を見ていたエステリーゼとカロールはお互い顔を見合わせて笑った。

それから一行は再び歩き出す。

「ユーリはさ、セアラのことどう思ってるの？」

「は？…なんだよ、いきなり」

その途中。カロールが、少し前を歩いてエステリーゼと話しているセアヴィラをみてユーリに問う。

「だってセアラってユーリにいつもあんな調子じゃん？だからセアラのユーリに対する気持ちは分かるんだけど、ユーリってばいつもセアラのこと軽くあしらってて分かんないんだもん」

「お子様は知らなくていいんだよ」

「教えてくれたっていいじゃん！」

はぐらかすユーリの服をガシツと握って訴えかけるカロール。ユーリはふとセアヴィラを見てからため息を吐く。

「あいついつもあんなんだろ？語尾とか、だよ、って伸ばしてんじゃない。それが巫山戯てるようにしかみえない。だからスルーしてんの」

「それ、答えになってないよ。じゃあ好きと嫌いで言うならどっちなのさ！」

「好きか嫌いねえ…（…最近のガキってこんにませてんのか？）」

カロルのしつこい問いに眉間に眉を寄せながら彼女を見ると、視線に気が付いたのかこちらを振り向くセアヴィラ。ユーリをみた彼女はにっこりと微笑んだ。

「……………どっちかっていうと」

「え？」

「なんでもねえ」

「ちょ、ちょっと、ユーリ！」

ユーリはハツとして歩く速度を早めた。そしてセアヴィラの横を通り過ぎた時……

「…ま、好きなんじゃねえの？」

そう呟いた。しかしそれは誰に聞こえる事なく闇夜に消えた。

満開に咲く桃色の花

(僕の中に僕以外の存在を感じるんだ)

(そう言えばユーリにお姫様抱っこされたんだよね！うへえ幸せだよ〜)

(今更かよ)

(だってあの時はあんな状態だったんだしい)

(……そう言えばおまえ、エステルに何をしたんだ？)

(え？)

(なんか呟いた後、銃でエステルのこと撃つたじゃねえか)

(ああ！？そう言えば！申し訳ありませんエステル様！！あなた様に銃を向けるなんて守護役ガーディアンとして失格です！どんな処罰でも受ける覚悟があります！！)

(いえ、気にしないでください。もしかしたらあれがあつたから、樹が蘇ったのかも知れませんが。わたしも何をしたかのかは覚えてないんですけどね)

(エステル様様：僕は一生あなた様に仕える所存です！…とはいえ、僕も記憶が曖昧なんですよね…)

(ま、終わったことはいいいんじゃねえの？無事樹が復活したんだし)
(ふたりのお陰だね！)

(…自分の力に疑問を持つなあ…)

07 魔導士の住む陰の街

またまた

期待はずれ

僕たちの方も

ユーリの方も

あれから何日か歩いて、一行はアスピオへと辿り着いた。確かに日陰の街と呼ばれるだけあって、街の中に日は一切差し込んでない。当たり前前に洞窟の中にあるからなのだが。何度か任務で世界を回ったりしていたセアヴィラもさすがにこの街までは来たことは無かった。

「通行許可証の提示をお願いします」

「許可証…ですか…？」

街の入り口に近づくや否や門番にそう言われて思い出す。確かここは帝国直属の施設で許可証がなければ入れないんだった。こんなところまで来るとは思ってたセアヴィラだったので生憎許可証なんて持ってない。

『（っていうかやっぱり僕の顔はあんまり知れ渡ってないんだね。今は凄くありがたいけど）』

「セレーネ、って言っても通してくんねーの？」

『今は騎士団裏切ってまでここにいるからさ、勘弁してよー』

多分彼女の行動はそれに値するだろう。例え刺し違えてでもエステルを連れ戻すのがセアヴィラの役目なのだ。こんな立場じゃなかったら思いっきり家の名を利用するのだけけど。

「しゃーない。入れないってんなら呼んできてくんないかな？」

「その知り合いの名は？」

「モルディオ」

ユーリがその名を口に出した直後、（兜を被っていて見えないが恐らく）騎士たちは顔を真っ青にして動揺した。

「モ、モルディオだと!？」

『はえ?何々?』

「や、やはり駄目だ。書簡にてやり取りをし、正式に許可証を交付してもらえ」

さっきはその気でいてくれたのに、役に立たない人たちだ、とセアヴィラは思う。まるで怖がってるようにしか見えない。騎士が怯えていてどうするのだろうか。

「あの、フレンと言う名の騎士が訪ねて来ませんでしたか？」

「施設に関する一切は機密事項です。些細なことでも教えられませんか」

「フレンが来た目的も？」

「もちろんです」

『君たち口軽いねー。フレン、来たんだ？』

エステルの言葉に口を滑らせた騎士に、にやにやと効果音が付きそんな笑顔でセアヴィラが言えば、慌てて視線を逸らす彼。

「じゃあせめて伝言だけでもお願いできませんか？」

「やめとけ、こいつらに何言っても時間の無駄だって」

『そーですよ。ほら、行きましょ』

セアヴィラたちは入り口から少し離れて話し合う。許可証がなきゃ正面からは入れない。かといって諦めるつもりもない。だからカールが提案した他の出入り口を探すことにした。

『お、一応扉は見つけたけどー…』

「都合よく開いちゃいないか」

入り口から左の方へ行つたところに見つけたのだが、カギがかかっ
ていて開かない。最終、壁を越えて中から開ける、しかないか。

「早くも最終手段かよ…」

『じゃあぶっぱなす？』

「セアヴィラ！」

ガチャ、と銃を構えるとエステルに怒られたセアヴィラ。冗談なの
に、と彼女はしぶしぶ銃をフォルダーに仕舞う。

「フレンが出てくるのを待ちましょう」

「フレンは出てきたとしても、モルディオは出てこないだろ」

「出てきたフレンにお願いして中に入れてもらおうのはどうです?」

「あいつ、この手の規則にはとことんうるさいからな。頼んでも無駄だって」

ユーリの言う通り。フレンは昔から頑固だからセアヴィラが頼んでも通してくれそうにないだろう。どうしようか悩み切っていたところで、カロルが扉の前で何かをしているのが目に入った。

「よし、開いたよ」

どうやらカギをこじ開けていたらしい。

「……おまえのいるギルドって、魔物狩るのが仕事だよな? 盗賊ギルドも兼ねてんのかよ」

「え、あ、うん……まあ、ボクぐらいだよ。こんなことまでやれるのは」

妙に歯切れの悪い言い方。しかしあまり気にせず、ユーリはドアノ

ブへと手を掛けた。それをエステルが慌てて止める。

『つて、言いましても…』

「フレンが出てくる偶然に期待できるほど、オレたち、我慢強くないんだよ。だいたい、こういうときに法とか規則に縛られんのが嫌で、オレ、騎士団辞めたんだし、セアヴィラだって少なからずそう思ってるぜ」

確かにセアヴィラもユーリと同じ理由で騎士団を辞めようとしていた。それでも守りたいものがあるから強くなりたい、と騎士団に居続けている彼女である。

「んじゃ、エステルはここで見張りよろしくな」

『ああ、見張りなら多分安全ですね！お願いします！』

「え、えっと、でも、あの……っ！わ、わたしも行きますっ」

後を慌ててついて来る彼女を見て、セアヴィラから小さく笑みが零れた。入ったそこは図書館のようなところで、結構な数の本がずらりと並んでいた。そこにいた一人の男性にフレンのこととモルディ

才のことを聞いてから、外へと出た。

『うーん、街の中見回してもフレンいないねえ』

「んじゃま、モルディオんところに行ってみつか」

『さんせーい！』

「だーから引つ付くな！！」

エステル目的であるフレンの姿はなく、セアヴィラたちはモルディオに会いに行くことにした。広場を抜けた先に小さな小屋がある。そこにモルディオはいるとのことだった。

「？絶対、入るな。モルディオ？」

「ここか」

扉に貼り付けてある紙にはそう書いてあり、ここがモルディオの家だということが分かった。ユーリがドアノブを回すと案の定カギがかかっており、次に彼は扉をノックする。

「普通はノックが先ですよ…」

『まあまあ。ユーリも下町のために必死なんですから大目に見てください』

セアヴィラが言えば仕方なさ気に肩を落とすエステル。

「いないみたいだね。どうする?」

「悪党の素へ乗り込むのに遠慮なんていらないうって」

『じゃあぶっぱなす?』

「そんな笑顔で言わないでくださいセアヴィラ!ダメに決まってるじゃないですか!これ以上罪を重ねないでください」

にっこりと銃を構えて言えば腕を掴まれて止められる。もう、エステリーゼ様ってほんとに冗談が通じないんだから、とセアヴィラは銃を一回転させてから仕舞った。

「なら、ボクの出番だね」

「え…？出番って……」

カロルは得意げに笑ってピッキングを始める。

「それもだめですって！」

『ぶっぱなすよりはマシですよ』

「でも…！」

そんなことを話してるうちにカロルはカギを開け、セアヴィラたちは家の中へとお邪魔する。中は本やものがたくさん散らかっていた。

「すっごっ…。こんなじゃ誰も住めないよ」

「その気になりゃあ、存外どこだって食ったり寝たりできるもんだ」

「ユーリ、先に言うことがありますよ！」

腰に手を当ててユーリに言うエステル。案外彼女も頑固なんだと思わされる。

「こんにちは。お邪魔してますよ」

「カギの謝罪もです」

「カロールが勝手に開けました。ごめんなさい」

気持ちが悪くもってないところがユーリらしいっていうかなんとか。あーでもそーゆーところも好きだなあ、とハートを撒き散らしてセアヴィラはユーリを見ていた

「もう、ユーリは……ごめんください。いい。ごなたかいらっしやいませんか？」

呆れたエステルがそう叫ぶが、返事は帰ってこない。

「居ないんなら好都合。証拠を探すとするか」

ぐる、と部屋の中を見回せば魔導器の模型や、術式が書かれた黒板があるのがみえる。因みにあれは火の術式だろう。コツ、とセアヴィラが部屋の中に足を踏み入れたとき、突然本の山の中から人が出てきた。

「ぎゃああ~~~~~っ！あう、あう、あうあうあう」

驚いたカロルは叫び声をあげて慌ててユーリの後ろに逃げ隠れる。

『（なんて私得！僕もユーリに引っ付きたい！！！！）』

と、セアヴィラが思っていたなんてつゆ知らず。

「……ひるわこ……」

その人がそう呟くと、足元に火の魔術の光が現れる。セアヴィラは咄嗟にエステルを後ろに庇った。

「ドロボウは…ぶっ飛べ…!!」

ユーリもいつのまにかそこから逃げてて、残されたカロールに、放った術が命中する。

「お、女の子っ!?!」

魔術を放った衝撃でフードが取れ、その素顔が露わになる。まだあどけない顔立ちは十五前後くらいの歳に見えた。その時、後ろに回ったユーリが剣を彼女に突き立てる。

「(そんなプレイもいいかもユーリ…!あ、でも剣怖いから勘弁かな…)」

キラリ、と光る刃に少しばかり身震いする。思い出すのは小さかつ

たあの頃のこと。

「こんだけやれりゃあ、帝都で会った時も逃げる必要なかったのにな」

「はあ？逃げるって何よ。なんで、あたしが、逃げなきゃなんないの？」

「そりゃ、帝都の下町から魔導器の魔核を盗んだからだ」

ユーリの言葉にさらに眉間に皺を避ける少女。

「いきなり、何？あたしがドロボウってこと？あんた、常識って言葉知ってる？」

「まあ、人並みには」

「勝手に家上がりこんで、人をドロボウ呼ばわりした拳句、剣突きつけるのが人並みの常識!？」

そんな彼女をエステルが落ち着かせ、なんとか話し合う形に行った。

「で、あんたら何？」

「えと、ですね…このユーリと言う人は、帝都から魔核ドロボウを追って、ここまで来たんです」

「それで？」

「魔核ドロボウの特徴ってのが…マント！小柄！名前はモルディオ！だったんだよ」

先を問う彼女を指さしてユーリは言う。

「ふ〜ん、確かにあたしはモルディオよ。リタ・モルディオ」

彼女がモルディオ本人と言うなら本当にこの子が魔核を盗んだのだろうか。そんな風には見えないんだけど、とセアヴィラはじつとリタを見やる。

「で、実際のところどうなんだ？」

「だから、そんなの知ら……あ、その手があるか」

ふと思い出したようにリタが顎に手を当て、やがて顔を上げた。

「ついて来て」

「はあ？おまえ、意味分かんねえって。まだ、話が……」

「いいから来て」

歩いて行くこうとするのを引き留めようとしたが、リタは振り向いてそういう。どうやらシャイコス遺跡に盗賊団が現れた話を聞いて、その盗賊団が盗んだのではないか、と言う考えらしい。

「それ、本当かよ」

「協力要請に来た騎士から聞いた話よ。間違いないでしょ」

その騎士は多分フレンのことだろう。要請された彼女がここにいる

ということは断られたらしい。でもまあ行ってみる価値はある。もしかするとフレンと会えるかもしれない。

「相談、終わった？じゃ、行く」

「とか言っつて、出し抜いて逃げるなよ」

「来るのが嫌なら、ここに警備呼ぶ？困るのはあたしじゃないし。捕まる、逃げる、ついてくる、どくすんのかさっさと決めてくれな
いっ。」

セアヴィラがユーリを見れば、彼は仕方なさ気に肩をくすめた。

「わかった。行ってやるよ」

それから一行はリタの案内でここから東にあるシャイコス遺跡に向かうことになった。

魔導士の住む陰の街

(フレンとなかなか会えないなあ)

(大丈夫ですよ、セアヴィラ)

(…そうですね！)

08 天才魔導士と魔導器

大切なもののためなら

僕はこの身だって

捧げてやる

シャイコス遺跡に辿り着いた一行だったが、そこにフレンの姿はなく、代わりに入り口の近くに新しいたくさんの足跡を見つける。盗賊団か騎士団か、はたまたその両方のものだろう。一行はリタに続いて遺跡の中へ入る。しかし盗賊団も騎士団も見つけることはできなかった。

「騎士団も盗賊団もいねえな」

「もっと奥の方でしょうか？」

『うーん、声とか足音とか聞こえませんが、もういないんじゃないでしょうか…』

耳のいいセアラが言うならそうなのかも、とエステルは肩を落とす。するとリタが顎に手を添えて考える仕草を見せる。

「まさか、地下の情報が外にもれてんじゃないでしょうね」

「地下？」

エステルが聞き返せばリタは小さく頷く。

「ここ最近になって、地下の入り口が発見されたのよ。まだ一部の魔導士にしか、知らされてないはずなのに…」

「それをオレらに教えていいのかよ」

「しょうがないでしょ。身の潔白を証明するためだから」

「身の潔白ねえ…」

疑い深いユーリに苦笑いしたセアヴィラが、ふ、と石像の近くの地面を見れば、こすれた後が見つかった。

「発掘の終わった地上の遺跡くらい盗賊団にあげてもよかったけど来て正解だったわ」

「なら、早く追いかけないと。これを動かせばいいんじゃない？」

『あ、じゃあ僕がやるー！』

はいはい、と高々と手を挙げてセアヴィラは石像の土台を押しそうすれば、すかさずユーリが隣に立って同じように手を添えた。

「行くぞ、セアラ」

『ユーリ後で抱きしめていい？』

「やめろ」

ちえ、と口を尖らせたセアヴィラだったが、直ぐにユーリと共に石像を動かした。その下から現れた階段を下り、一行は地下遺跡の中へ足を踏み入れる。

「遺跡なんて入るの初めてです…」

『ですね〜』

辺りを見回しながら歩いていると後ろを歩いていたリタが、そこ、足元滑るから気を付けて、と注意する。

「何見てんのよ」

そんな彼女をセアヴィラとユーリが見てると、リタは眉に皺を寄せた。

「モルディオさんは意外とお優しいなあと思ってね」

「はあ……やっぱり面倒を引き連れてきた気がする。あんたもそう

思ってるわけ？」

『僕？うーん、じゃ、それでいいよ』

「は？」

リタは首を傾げるが、まあいいわ、と再び前を向いて歩き出す。ふたりは顔を見合わせて彼女についていく。

「別にひとりでも問題無かったのよね……」

「リタはいつも、ひとりで、この遺跡の調査に来るんです？」

「そうよ」

エステルという言葉に一言で返すリタ。ふい、と向ける横顔がなんとなく寂しげに見えたのは気のせいだろうか。

「畏とか魔物とか、危険なんじゃありません？」

「何かを得るためにリスクがあるなんて当たり前じゃない。その結果、何かを傷付けてもあたしはそれを受け入れる」

「傷付くのがリタ自身でも？」

ああそうか、似てるんだ、とセアヴィラはそつと眼帯の上から左目に触れた。小さな頃から疎まれてたセアヴィラは多分、リタと同じようなことを思っている。

「悩むことはないんです？躊躇うとか…」

「何も傷付けずに望みを叶えようなんて悩み、心かが贅沢だから出来るのよ」

例え自分自身が傷付こうとも、セアヴィラにはやりたいことがあった。否、やらなければならぬことが。

「それに、プラスチック魔導器はあたしを裏切らないから…。面倒がなくて楽なの」

リタは言いながら自分の魔導器に触れる。ここまで言うには過去に何かあったに違いない。まだ齡15の少女なのだ。あんなとこに—

人で住んでいることにもなんだか引つ掛かる。

「なんか、リタって、すごいです。あんなにきっぱりと言い切れて」

「何が大切なのか、それがはっきりしてんだな」

大切、とエステルが言葉を繰り返して、少しだけ俯く。

「わたしは、まだその大切がよくわかりません…」

「適当に旅して回ってりゃあ、そのうち、嫌でも見つかるって」

エステルが頷くと、前を歩くリタに呼ばれたため、一行は止めていた足を進める。一番後ろを歩くセアヴィラはちらりとユーリを盗み見る。

『（僕にとってはユーリが一番大切なんだ。だからその為になら邪魔なものは僕が排除する。今度こそ僕が守るんだ）』

「おいセアラ、行くぞ」

『！はいっ』

ユーリに呼ばれたセアヴィラは表情を一変させて彼を追った。奥に進んで行く途中で魔導器を発見したが、魔核コアが抜けてて使えなかったり、ソーサリーリングを使って無かった道を出現させたりして、やっとのことで最奥へと辿り着いた一行。そこには石の大きな人形、基、魔導器があり、リタはそれに真っ先に駆け寄る。

「こんな人形じゃなくて、俺は水道魔導器アクエプラスティアが欲しいな」

コン、とユーリが人形を軽く叩けば、リタが触らないでと怒鳴る。

「この子を調べれば念願の自立術式を……あれ？」

『これも魔核がないねえ』

リタの後ろから人形を見れば確かに魔核がないのが分かった。するとユーリが高台にフードを被った人を見つける。セアヴィラたちに気付いたそれは慌てて柱の影に隠れた。

「リタ、お前のお友達がいるぜ」

「ちょっと！あなた、誰？」

柱を睨み付けてリタが言えば、恐る恐る出てくる。

「わ、私はアスピオの魔導器研究員だ！」

声からして男だろう。セアヴィラが銃を向ければ後ずさるフードの男。

「おまえたちこそ何者だ！ここは立ち入り禁止だぞ！！」

「はあ？あんた救いようのないバカね。あたしはあんたを知らないけど、あんたがアスピオの人間なら、あたしを知らないわけないでしょ」

無茶苦茶言ってるが、確かにアスピオの人たちの様子を見る限りリタを知らない街の人はいないだろう。なんとなくだが納得したセアヴィラだった。

『ばーんっ』

視界から彼が動いた為、一発銃弾を放つが柱の向こうに回って避けられた。ユーリも剣を抜いてフードの男を見据える。男が魔核を目の前の人形に嵌め込むと、それは音を立てて動き出した。

『エステリーゼ様!!』

「! セアヴィラ!!」

『ぐ、……がつ!?!?』

エステルを庇うようにセアヴィラが前に立つと、振り上げられた人形の腕がセアヴィラを吹き飛ばす。彼女は近くの柱に激突して、それを伝うように地面に落ちた。

「今、傷を…！」

『ダメです…！』

痛む体で起き上がり、なんとかエステルの治療を止めさせるセアヴィラ。腕を掴まれたエステルは顔を青ざめさせた。思い出したのは城でのこと。治療した後、セアヴィラの体調が可笑しくなったのだ。

「セアヴィラっ」

『大丈夫、ですよ……』

ぐっと腕に力を入れてセアヴィラは立ち上がり、双銃を構える。

「でも怪我が……！」

『後で自分で治します。リタ！』

不思議そうに見ていたリタに声を掛けると、ハツとして逃げていくフードの男を見やる。

「あたし、あのバカ追うから！ここはあんたらに任せた！」

「任せたって、行けねえぞ!？」

いつの間にか通り道が塞がれていて追いかけることが出来なかった。セアヴィラは舌打ちをしてユーリたちの元へ駆け寄る。

「仲良く人形遊びするしかねえな」

「速攻ぶっ倒して、あのバカ追うわよ！」

『魔核をぶっ壊せばいいんでしょ?』

「魔核も魔導器には大切なものなの!!動きを止めなさい動きを！」

ちえ、とセアヴィラは銃を一回転させてからユーリたちに続いて人形に向かっていく。

リタの魔術のバックアップもあり、簡単に倒せた一行はさっきの男を追う。もう遠くに逃げたか、なんて思っていれば案外近くにいる

少なからず安心した。囲まれていた魔物を倒してから、セアヴィラたちは男を問い詰める。

「魔核盗んで歩くなんてどうしてやるうかしら……」

リタが凄んだ顔で言えば、男は情けない声を出す。

「俺は頼まれたただけだ……。魔導器の魔核を持ってくればそれなりの報酬をやるって」

「おまえ、帝都でも魔核盗んだよな？」

この調子だと全部吐くだろうとユーリが聞くが、自分じゃない、と首を振る男。この男じゃないとすれば他に仲間がいるということだ。男は、デデッキという人物が帝都に行ったのだと言う。それから依頼人がトリム港にいる、顔の右に傷のある隻眼で体格のいい大男と分かった。

「騎士も魔物もやり過ぎして奥まで行ったのに！ついてねえ、ついてねえよっ！」

「騎士？やはりフレンが来てたんですね」

「ああ、そんな名前のやつだ！くそー！あの騎士の若造め！」

『「……つつさい！」』

近くで叫ばれて不快に感じた二人はグーで男を殴った。リタと目線が合ったセアヴィラが、へにやり、と笑うが彼女は直ぐに顔を反らす。

「ちょ、セアラ、リタ、気絶しちゃったよ……どうすんの？」

『僕は知らない。リタ』

「後で街の警備に頼んで拾わせるわよ」

「それじゃ、アスピオに戻るか」

はい、と片腕を上げたセアヴィラだったが、次の瞬間、くらっ、と視界が揺れて地面に倒れた。

「セアラー！っお前、また怪我治して無かっただろ」

直ぐにユーリに起こされて、あはは、と嬉しそうに笑うセアヴィラ。
しかし治すまでは許してくれないようだ。

「あんだ、なんでさっきこの子の治療断ったのよ」

『…それは、』

自分でもこの身に起きてる原因が分からないのだ。帝都の時も、ハルルの時も、エステル力が干渉したに違いない。なんとなく、だが。

「いいから早く治せ」

『じゃあユーリがキスしてくれたら直ぐに治すよ』

なんて冗談を言ったセアヴィラだったが、ユーリは彼女の額にキスを落とした。初めての事にセアヴィラはきょとんとした後、顔を真っ赤に染め上げた。

「ほら、早く」

こくこく、と何度も頷いてから治療を始めるセアヴィラ。それを見たりタが咄嗟に彼女の両腕を掴んだ。

『！　り、リタ……？』

「あんだ、今の……」

バレたか、とセアヴィラは目を反らす。しかしユーリが彼女を立たせて、行くぞ、と歩き出したため、話は中断された。ありがたいのかそうでないのか、よくわからなかい。もしかしたらユーリも気付いているんじゃないか、とセアヴィラは眉を潜めた。

それからアスピオに戻った一行はリタの家、墓、研究所で警備に連絡してくると行ってしまった彼女が戻ってくるを待っていた。ユーリはかなりくつろいでいて、セアヴィラもその横に座り込んで銃の手入れをし、部屋の中央では落ち着かない様子でエステルがうろつろしている。

「フレンが気になるなら黙って出て行くか？」

「あ、いえ、リタにもちゃんと挨拶をしないと…」

「なら、落ち着けて」

よし、とピカピカになった漆黒の銃をホルダーに仕舞ったセアヴィラはそのままユーリの横に寝そべった。

『ね、ユーリはこれからどーするの？』

「魔核ドロボウの黒幕のところに行ってみっかな。デデッキってやつも同じとこ行ったみたいだし」

「だったら、ノール港まで一直線だね！」

セアヴィラたちの言葉に、反対側にいたカロルが反応する。

「トリム港って言ってなかったか？」

『んとね、ノールとトリムはふたつの大陸にまたがったひとつの街なんだよ〜』

このイリキア大陸にあるのが、カプワ・ノール。通称ノール港。隣のトルビキア大陸には、カプワ・トリム。通称トリム港があるとカロルが説明する。途中、エフミドの丘と呼ばれるところがあるが、西に向かえばすぐらしい。

「わたしはハルルに戻ります。フレンを追わないと」

『僕はエステリーゼ様についていく約束しましたからね。お供させて頂きます』

「……じゃ、オレも一旦、ハルルの街へ戻るかな」

セアヴィラは目を輝かせて、ガバツ、と起き上がる。見える人には犬耳と、激しく振られる尻尾が見えるだろう。

「西に行くならハルルの街は通り道なだけだ」

『えへへ〜それでも幸せ〜』

頬をめい一杯緩ませてセアヴィラは再び床に寝そべる。すると丁度リタが帰ってきた。彼女は床のセアヴィラとユーリを見下ろして呆

れた表情になる。

「待ってるとは言ったけど……どんだけくつろいでんのよ」

『あ、お帰り、リタ〜』

ひらひらと手を振ればため息を吐くリタ。

「疑って悪かった」

「軽い謝罪ね。ま、いいけどね、こっちも収穫あったから」

立ち上がったユーリが言えば、リタは気にしてなさそうに、次いでセアヴィラを横目で見やる。

『へ？僕？』

こて、と首を傾げるセアヴィラ。そんな彼女の額を小突き、ユーリ

は扉へと向かう。セアヴィラは額を押さえてにやにやと笑っていた。

「んじゃ、世話かけたな」

「なに？もう行くの？」

「長居してもなんだし、急ぎの用もあるんだよ」

「リタ、会えて良かったです。急ぎますのでこれで失礼します。お礼はまた後日」

「……わかったわ」

セアラ、と呼ばれて慌ててユーリたちを追いかける。広場まで来ると、リタが後ろから着いて来ていたのに気付く。

「見送りならここでいいぜ」

「そうじゃないわ。あたしも一緒に行く」

勿論誰もが目を見開く。

「まさか、勝手に帰るなってごういづことか？」

ユーリの言葉に呆気なく頷くリタ。その目を見る限り、本気だったことが分かる。

「いいのかよ？おまえ、ここの魔導士なんたる？」

「……んんー……ハルルのシルトプラスティア結界魔導器を見ておきたいのよ。壊れたままじゃまずいでしょ」

「それなら、ボクたちで直したよ」

「はあ？直したってあんたらが？素人がどうやって？」

その問いに答えようとしたカロルを、素人も侮れないもんだぜ、とユーリが遮る。内心ホツとするセアヴィラ。あんなことを人に言うても信じてもらえないのがオチだろう。

「ふん、ますます心配。本当に直ってるか、確かめにいかない」と

「じゃ、勝手にしてくれ」

諦めたようにユーリは肩を竦める。エステルは、同年代の友達が出来た、と喜んでいた。嬉しそうに彼女に、なんだか複雑な思いが湧きつつも、セアヴィラは小さく微笑んだ。

天才魔導士と魔導器

（もう僕、幸せすぎるよっ！）

（？ どうした、セアラ）

（あ、いや、エステリーゼ様、嬉しそっだなって思っ）

（……ま、心配しなくてもお前もそのうち分かるだろ）

（え？何が？何々？）

（自分で考える）

（相変わらずだなあっ）

09 騎士団よりも想い人

騎士団とユーリなら

勿論ユーリを選ぶ

当たり前じゃん！

一旦ハルルに戻った一行。リタは満開のシルトプラスチックア結界魔導器を見て目を見開いていた。少し離れていただけに、この間より美しく咲き誇っているハルルの樹。舞い落ちた花びらはまるで絨毯のように地面に敷き詰められていた。

「おお、皆さんお戻りですか。騎士様のおっしゃったとおりだ」

丁度家から出てきた長老がフレンからだたとわたしたちにあるものを渡す。そこには妙な絵が描かれた紙と、フレンの手書きの手紙があった。

「え？こ、これ手配書！？ってな、なんで？」

「ちよつと悪さが過ぎたかな」

『あんの騎士団！！どうやったらユーリがこんなへなちよこに見えるんだよ！！僕ならもつとかつこよく描くよ！？ねえユーリ！？』

「はいはいはい」

『しかも5000ガルド！？なんてちつぽけな値段！！ユーリの凄さを分かってないんだからあ！』

今にも破いてしまいそうなセアヴィラから手配書を取り上げて、いつものようにユーリは彼女を軽くあしらう。言いたいことは全部セアヴィラが言ってしまうため、ユーリはただ笑うだけだった。

「5000ガルドなんて脱獄にしては高すぎだよ！他にもなんかし

たんじゃない？」

セアヴィラの頭には皇女誘拐の文字が浮かんでいた。あの時ちゃんと処理すべきだったか。それからフレンの手紙には先にノール港へ行くことと、暗殺者に気を付けろということが書かれていた。

『はれ？ユーリ、どこ行くの？』

「リタが悪さしてねえか見に行くの」

『浮気はダメだからね〜！』

「そもそも付き合ってねえっつーの」

ぶんぶんと手を振ってセアヴィラはユーリを見送り、ふとハルルの樹を見上げる。良く見れば全ての花が咲いていて蕾ひとつない。満開の時期でもこんな風には咲かないだろう。

『（僕と、エステリーゼ様の力……なの？）』

じつと手のひらを見詰めて考え込む。思えば自分には計り知れない力が幼い頃からあった。ユーリが彼女を守って傷付いたあの日から、強力な魔術が使えるようになったのだ。しかも魔導器無しときた。異常なのかもしれないな。そうセアヴィラが思った直後、嫌に耳に響く人物の声が聞こえてきた。ルブランだ。

「エステリーゼ様！セレーネ様！」

げっ、とセアヴィラは見るからに嫌そうな表情になる。収穫はあったが直ぐにハルルを出るべきだったと後悔する。一言二言話してから、ルブランはセアヴィラとエステルを交互に見やる。

262

「ささ、今のうちに、セレーネ様とエステリーゼ様は我らのもとに」

「帝都まで丁重にお送りするのである」

「あとはユーリをとっ捕まえればいいのだ」

そんなことをすればどうなるか分かってるよね、と言いたげに銃を手取るうとしたとき、セアヴィラの肩をユーリが、ポン、と叩いた。

『ユーリ』

「！ここで会ったが百年目、ユーリ・ローウェル！そこになおれえ〜！」

「今回はバカにしつこいな」

カリカリしている彼にエステルが弁解するが、自分たちのいいように解釈され、結局戦うことに。オーバードリミッツを使用した戦闘は久々で、セアヴィラはやけにやる気満々だった。いつもより威力の高い攻撃にユーリ以外は冷や汗を垂らす。

『はいっ排除完了〜』

「…ほんと、ユーリのことになると人が変わるよね、セアラって」

くるくる、と巧みに銃を回転させてホルダーに仕舞うと、ルブランの前に立つセアヴィラ。

『なんで僕に任せてくれないのかな〜？エステリーゼ様は必ず僕が』

守るって言ったんだけど？」

「し、しかし騎士団長が……！」

『騎士団長が、何？』

急にセアヴィラの表情が一変する。冷めたその瞳。今のルブランたちはまるで蛇に睨まれた鼠と言えよう。

「セアヴィラ……？」

『もう一度聞くよ。騎士団長が、何て？』

ジャラ、とアレンジした騎士団のマークを模した刻印が着いたネックレスを見せる。これは守護役^{ガードイアン}だけに渡される特別な刻印なのだ。それを見たルブランたちは、ごくり、と唾を飲み込むだけだった。

『……エステリーゼ様はまだ帰らないってさ。だから帰ってくれないかなあ？』

ふ、いつもの調子に戻ったセアヴィラ。不思議そうにエステルが見てると、ハルルの樹がある丘の方に見覚えがある人たちがいることに気付く。

「ユーリっ！あの人たち！」

城のフレンの部屋であった連中と同じ恰好をしている。十中八九同じ組織の奴らだろう。彼らは何やらこちらをチラチラ見ており、これで彼らに自分たちが狙われていることが明らかになった。一行は急いでノール港に向かうことにし、ハルルの街を後にした。

『しつこい人は嫌われるって知らないのかなあ！』

「あんたが言う？あんたが」

呆れたようにリタが言うと、え？何で？、とニコニコ笑って聞き返すセアヴィラ。彼女は深くため息を吐いた。

ハルルから暫く北に進んでエフミドの丘についた一行は、リタの騒ぎに巻き込まれて遠回りをしながら先へ進むことになってしまった。

『めんどくさっ！！！』

「わ、悪かったわね！」

『あ、いや、そーゆーつもりじゃなかったんだけどね。でもリタが知らない術式か…』

「あれは絶対可笑しかったわよ…！！！」

うーん、とセアヴィラは唸る。そんな魔導器を壊して何がしたかったのだろう。確か竜に乗った奴が槍で壊していた、との噂らしい。でも考えても仕方なかったのでセアヴィラたちは先へ進む。やがて少しばかり広い場所に出たとき、ハルルの街を襲った魔物が現れた。

「ほっといたらまたハルルの街を荒らしに行くわね、多分」

「でも今なら結界があります」

「結界の外でも近所にこんなのなら、安心して眠れねえからな」

魔物が咆哮した直後、みんなは一斉に身構える。振り上げた手に僅かな違和感を感じたセアヴィラは距離を取って五感を澄ませた。

『！ そいつ、毒を持ってるから気を付けて』

「毒！？ちよ、そんなのどうやって……！」

『ちゃんと援護するよ〜だから早く行けカロル』

「鬼……！」

チャツ、と銃を構えて詠唱を始めるセアヴィラ。

『燃え盛れ、赤き猛威よ！？イラプション?!?!』

弱点である火属性の魔術を叩き込む。次いでリタ、エステル of 攻撃も当たり、そしてユーリとカロルが魔物を押さえ込む。あの爪に引っ掛かれただけでも毒を受けてしまう。僅かな動きにも注意し、腕を振り上げたのを見たセアヴィラはフレアショットで魔物を奥へと押しやる。

『これで最後！貫けえっ!!』

一発の球に高い威力を込めて魔物を撃ち抜く。ドシン、と地鳴りを立ててそれは倒れた。セアヴィラは銃をしまい、誰にも怪我がない事を確認してひとつ息を吐いた。

「な、なーんだ。手応えゼロだったね」

「でも、この先もまだ何匹も出てくるかも…」

「だ、大丈夫だって」

「ま、そうならないこと、みんなで祈ろうぜ」

そうして獣道を進み続け、やがて辿り着いたのは目の前に海が広がる丘の上。初めての海にエステルは感嘆の息を吐く。

「セアヴィラ！海ですよ、海！」

『ああ、うん、そうですね…』

ただひとり、セアヴィラだけは一行から離れた場所にいた。海が、いや、水が嫌いなのだ。情けないがカナヅチであり、昔溺れたことがあった。川ならまだマシも、海となれば見ることにすら恐怖に値する。それを知らないエステルはただ首を傾げる。

「セアラ」

『気にしないで。僕、ここにいるからさ』

へらりと笑って手を振れば、ユーリはじっとセアヴィラを見る。何度か海を渡ったことはあるが、やはり慣れないものだ。

『うへ、そんなに見詰めないでよう』

冗談めいた口調で言えば、ユーリは苦笑いして海を見やる。ほんとはユーリの隣に並んで海を見てみたい。けど怖い。思いが矛盾してセアヴィラは踏み出せないでいた。

『（フレンにあつたら怒られそうだなあ）』

もう少しでノール港だと思えば、そんなことが頭に浮かぶ。楽しそうに話すみんなを横目で見ながら、セアヴィラはそつと魔導器に手を触れた。

それからエフミドの丘を出て海沿いに沿って歩いていけば、やっとノール港に着いた。しかし以前来た時とは雰囲気ガラッと変わっていてセアヴィラは目を細める。どうやらこの雨は数ヶ月続いており、船も暫く出ていないらしい。治安もなんだか悪くなっている。

『天候が悪くて船が出せない。税金が払えないならリブガ口を捕まえてこい、か……』

「あなた、どうかした？」

『いや、ただ……引っ掛かるんだよね……何が……』

顎に手を当てて、ユーリが仕出かしたことを見ていたセアヴィラ。その言葉にリタが鸚鵡返しで聞くが、彼女は何でもないと手を振った。

『あ、ユーリ待って〜!』

「おわっ！っ お前なあ…」

『気づいてる？』

抱き着いてこっそりと囁けば頷く彼。そのまま平然を装ってとある路地へと入り込む。すると行き止まりの所まで来るなり、黒づくめの連中に囲まれた。

『とっとなちやっちやと行きますか！』

「遅れんなよ！」

当然っ、と語尾に星が付きそつなテンションでセアヴィラが銃を構えれば、男たちが襲って来た。ふたりのコンビネーションは誰がどこから見てもかなり合っていて、次第に彼らを押ししていく。

『ちっ！！（狭いなあ！）』

しかし途端に飛び上がった二人の男が壁を蹴ってふたりを翻弄させた。セアヴィラはユーリと背中を合わせ事態に備える。

『ユーリ!』

すると上からではなく前から攻撃が来て、咄嗟にユーリが受け止めた。キーン、とそれを弾けば直ぐに体勢を立て直し、再び向かってくる男。さらにセアヴィラにも斬りかかって来たが、彼女は刀を銃で止め、蹴りで男を悶絶させる。直後、図上から攻撃が降り注ぐ。間に合わない、と判断したセアヴィラはユーリを庇うように壁際に押しやった。

「セアラ!」

痛みを覚悟したが、目の前に現れた見覚えのある金色に目を見開く。襲ってきた男たちを凧ぎ払うと、彼はセアヴィラを振り向いた。

「大丈夫かい、セアラ?それにユーリも」

『フレンっ』

「おまつ……それオレたちのセリフだろ」

「まったく、探したぞ」

「それもオレたちのセリフだ」

ユーリは言いながら一人の男に青い斬撃を食らわせる。次に立ち上がった三人の男にセアヴィラたちは向き直った。彼らの攻撃をユーリたちは受け、セアヴィラは一発、ひとりの男の脇腹に撃ち込む。そして後ろから来た男をタイミング良く避け、最後に三人の技が命中した。

「ふう……マジで焦ったぜ……」

一息吐いたところで、さて、とフレンが背を向けたユーリに斬りかかった。セアヴィラは咄嗟に彼の剣を銃で弾く。

『いきなりは酷いなあ、フレン』

「おまえ、なにしやがる！」

フレンは剣を構え直す。

「……ユーリが結界の外へ旅立ってくれたことは嬉しく思っている」

「なら、もっと喜べよ。剣なんか振り回さないで」

ユーリの言葉に彼は、ガンツ、と隣の壁に剣を突き刺した。

「これを見て、素直に喜ぶ気がうせた」

見ればユーリの手配書があり、賞金が10000ガルドに上がっていた。

『10000でも安いくらいだよ！ねえフレン！……』

「セアラ！君は仮にも騎士団員だろう！……」

『やだ、怒らないでよフレン……』

ガシツと腕に絡み付けば、フレンがピタリと固まった。彼はセアヴィラより幾分も地位が下だ。それなのにさっきのように振る舞うのは幼馴染みであり、少なからず彼女を意識しているからだろう。そんなセアヴィラを見ていたユーリが不機嫌そうに彼からベリツと引き剥がす。我に返ったフレンは咳払いをするとユーリに向き直った。

「騎士団を辞めたのは犯罪者になるためではないだろう」

「色々事情があつたんだよ」

「事情があつたとしても罪は罪だ」

「まったく、相変わらず、頭の固いやつだな……あつ」

踵を返したユーリの視線は騒ぎを聞き付けたのかこちらに来るエステルに向けられた。

「セアヴィラ、ユーリ、さっきそこで何か事件があつたようですけど……」

そこまで言ったエステルはふたりの後ろの人物に目を向ける。その表情が、パア、と明るくなった。

「……フレン！」

「え……」

彼女は嬉しそうにフレンに抱き付いた。セアヴィラとユーリは顔を見合わせて邪魔にならないようにその場から離れようとする。

「……こちらに。セアラもだ」

『え、なんで！？うわっ、ちょ、フリーレンー！！』

少し話していたエステルと、傍観していたセアヴィラはフレンに掴まれ、引きずられるように宿屋へ連れていかれた。残されたユーリは複雑そうに眉を潜めていた。

騎士団よりも想い人

理由なんて好きだからで十分！

10 黒い雲が広がる港街

案の定、

フレンにじつぴどく

叱られました…

君は守護役ガーディアンの立場を分かっているのか、とか、どうして勝手なことをしたのか、とか、なんでユーリを止めなかったのか、とか。言われるであろう内容は予想通り百発百中だった。エステルのお陰でフレンが落ち着いたあと、今までの経緯を話した。セアヴィラが止める暇もなく、ユーリの仕出かしたことについても、全部。

「全く…セアラならユーリを力づくでも止められたらろう？」

『え、僕にはそんなこと出来ないよう〜』

「君は自分勝手すぎるよ……！」

『何なの？フレンは僕が嫌いなの？そんなに僕ばかり責めて〜』

肘をついて口を尖らせたセアヴィラが言えば、フレンは言葉を詰まらせて視線を反らす。

「や、そう言うわけじゃ、ないけど……」

『ならいいじゃん〜エステリーゼ様も楽しそうだったし。ね、エステリーゼ様！』

「そ、そうですね、フレン。元々わたしが頼んだことですし……」

助けを求めるとフォローしてくれるエステルに、セアヴィラは心の中で感謝する。なんとかフレンを宥めると、丁度そこにユーリたちがやって来た。

「用事は済んだのか？」

『ユーリィVV』

ガタツ、と席から立ち上がったセアヴィラに苦笑いしたユーリ。相変わらず彼女はハートを散らして嬉しげに頬を桃色に染めていた。

『終わった終わったVV』

「セアラ！」

「そっちのヒミツのお話も？」

『うんうんっ』

フレンは、ダメだ、と諦めたように溜め息を吐いた。

「ここまでの事情は聞いた。賞金首になった理由もね。ほら、セアラ」

『うっ……むー……』

フレンに促され、仕方なくセアヴィラはユーリたちの前に出た。そして優雅な物腰で軽く会釈する。

『僕、セアヴィラ・ディアナ・セレーネはエステリーゼ様の守護役として、あなた方にお礼を申し上げます。僕と共に彼女を守って下さったこと、心より感謝します』

初めて彼女の本名を聞いたカロルとリタは目を見開いていた。言い終わったセアヴィラは、長く息を吐いて再びソファアに座り込む。如何せんこういうのは苦手だ。しかし守護役としてのケジメだ、と言われて仕方なくやったこと。珍しいもん見られたな、とユーリは小さく笑った。

「わたしからも、ありがとうございました」

座り込んだセアヴィラを見てから、エステルはユーリたちに頭を下げる。

「なに、魔核ドロボウ探すついでだよ」

「問題はそっちの方だな」

ん？、と眉を上げるユーリに、そう言えば、とセアヴィラはソファから立ち上がって彼を見る。

「どんな事情があれ、公務の妨害、脱獄、不法侵入を帝国の法は認めていない」

「う、ごめんなさい。全部話してしまいました」

『こっそり止めようとしたんだけど……』

「セアラ！」

名前を呼ばれて肩を竦めるセアヴィラ。その時の彼女は本当に申し訳なさそうな表情をしていた。勿論ユーリに対して、だが。

「セアラももう少し騎士団としての自覚を…」

「しかたねえなあ。やったことは本当だし」

そう言ってフレンの小言を遮ったユーリに、彼女はまた嬉しそうに笑った。彼はセアヴィラから視線を移し、ひとつ息を吐く。

「では、それ相応の処罰を受けてもらうが、いいね？」

「フレン!？」

『な、なら僕も…!』

同罪だから、と言おうとしたが、またユーリが言葉を遮る。

「別に構わねえけど、ちょっと待ってくんない？」

「下町の魔核を取り戻すのが先決と言いたいのだろ？」

やはりフレンは良く分かっている。そう思った時、部屋の扉が開いて女性と男児が入ってきた。

「フレン様、情報が…」

次に男の子はリタをみて顔をしかめる。何かしら不満を言った後、フレンに向き直った。女性の方はフレンの部下、ソディア。男の子の方はアスピオの研究所で同行を頼んだ、ウィチル。そうフレンが紹介した。逆にユーリを紹介しようとしたとき、彼が賞金首だと気付いたソディアが刀を抜く。しかし

チャッ

「！」

セアヴィラが一丁の銃を彼女の後頭部に突き付けた。

『そこから一歩でも動いて見なよ？その額に綺麗な穴が空くからさ』

「セアラー!!」

フレンが怒鳴るも、彼女は銃を下ろさない。口調はいつも通りだが、

纏う雰囲気は全く違う。そんな彼女に恐怖を覚えたソディア。

「ソディアも待て」

「しょ、賞金首ですよー！」

「彼は私と、そちらのセレーネ様の友人だ」

セレーネと言う名を聞いてソディアは目を見開く。後頭部に当たる銃口が酷く冷たい気がした。

「事情は今、確認した。確かに軽い罪は犯したが、手配書を出されたのは濡れ衣だ。後日、帝都に連れ帰り私とセレーネ様が申し開きをする。その上で、受けるべき罰は受けてもらう」

『そ〜ゆ〜こと〜。剣、仕舞ってくんない〜？』

にっこり笑うセアヴィラだったが、僅かな殺気が含まれていた。彼女は冷や汗を垂らし、剣を鞘に収める。

「セアラ」

『わかってるよう、フレン』

くるっ、と銃を回してから彼女もホルダーに戻した。

「し……失礼しました。ウィチル、報告を」

フレンは一度セアヴィラに目を向けてからウィチルの報告を聞いた。この街と付近に起こっている連続した雨や暴風は魔導器プラスチックが原因らしい。季節柄、荒れやすい時期でも船を出すたびに悪化するのには説明がつかない。その魔導器はラグウ執政官の屋敷内に運び込まれたとの証言もあるという。

「天候を制御できるような魔導器の話なんて聞いたことないわ。そんなもの発掘もされてないし……いえ、下町の水道魔導器アクエプラステアに遺跡の盗掘……まさか……」

「執政官様が魔導器使って、天候を自由にしてるってわけか」

ソディアは、あくまで可能性ですが、と頷く。悪天候を理由に港を封鎖し、出航する船があれば法令違反で攻撃を受けたこともあったとか。

「それじゃ、トリム港に渡れねえな……」

「執政官の悪い噂はそれだけではない。リブガ口という魔物を野に放って税金を払えない住人たちと戦わせて遊んでいるんだ。リブガ口を捕まえてくれば、税金を免除すると言ってね」

なるほど、あの違和感はこれだったか。セアヴィラは、スッ、と目を細める。色々自由なことはしているが、仮にも自分は騎士団の一員だ。それにこう言うことはユーリが放っておかないはず。

「色々ありすぎて疲れたし、オレらこのまま宿屋で休ませてもらうわ」

ヒラヒラと手を振る彼をじっと見てると、それに気づいたユーリが、来るか、とセアヴィラに目を向ける。彼女は、パアツ、と表情を明るくして、嬉しそうに彼に抱き付いた。エステルもその後につき、フレンはただ彼らを見ているだけだった。

それから、やはり気になる、トラゴウの屋敷に行ったのだが追い返され、入る方法がないか模索した結果、リブガ口を探すことになった。その魔物を捕まえれば屋敷に入ることは可能かもしれない。なんとか街の人たちから情報を集め、街の外へ出ようとしたとき、フレンと鉢合わせた。

「相変わらず、じっとしてるのは苦手みたいだな」

「人をガキみたいに言うな」

それだけ言ってフレンの横を通り過ぎようとする。

「ユーリ、無茶はもう……」

「オレは生まれてこのかた、無茶なんてしたことないぜ。そのセリフはセアラにでも言っただけやれ」

『えー！僕も無茶なんてしたことないよう〜』

へらり、と笑う顔の裏にはどんな思いがあるのだろう。自分を犠牲にする彼女を無茶してないなんて誰が思おうか。

「ユーリ、セアラ……」

『フレンこそ、無理は程々にね〜』

先を歩くユーリを追って、セアヴィラは駆け足で行ってしまった。ユーリは守るべき物のためなら、セアヴィラはそんなユーリのためなら、自分を傷付けることを厭わない。幼い頃から二人を知っているフレンはなんとも言えない気持ちで去っていくふたりを見ていた。

『楽勝〜』

やっと見付けたリブガ口はセアヴィラの活躍によって呆気なく地に倒れる。しかし余りダメージを負ってないところを見れば、ただ疲れさせただけと言うことが分かった。

一行はリブガ口の角だけを持ち帰り、それをこの街に来たときに入り口であった夫婦に渡してしまった。しかし、そう言うことか、と理解したセアヴィラは後ろからユーリの腰に抱き付いてすりよる。

「ちょ、セアラ……」

『えへへ〜最初からこうするつもりだったんでしょ、ユーリVV』

「思いつきだよ思いつき」

ぼんぼん、と何度か頭を撫でてからセアヴィラを引き剥がすユーリ。しかしこれで普通に屋敷に入る術がなくなった。

「執政官邸には、別の方法で乗り込めばいいだろ」

「なら、フレンがどうなったか確認に戻りませんか？」

「とつくにラゴウの屋敷に入って、解決してるかもしれないしね」

『それはどうかなあ〜』

セアヴィラにはそうは思えなかったのだ。ふ、と屋敷を向いて目を細めると、また妙な気配を感じた。この街にいる間は何故かその感覚に襲われている。

『（この感じは……エアル……？でも、何だろう……乱れてるような……）』

「セアラ、行くぞ」

考え事をしていたセアヴィラは、ユーリに呼ばれて我に返り、いつもの調子で元気に返事をした。話を聞きに宿屋へ入った一行は、フレンがいる部屋へと向かう。

『やっほ〜、フレン〜』

「相変わらず辛気臭い顔してるな」

ユーリを見るなり眉を潜めるフレン。

「色々考えることが多いんだ。君と違って」

「ふーん……」

つい、とソディアがセアヴィラに視線を向ける。気付いた彼女がにっこり笑うと、ソディアは先程のことを思い出して身震いした。その笑顔には刺のようなものが混じっていて、全身に酷く突き刺さる。

「執政官とこに行かなかったのか」

「行った。魔導器研究所から調査執行書を取り寄せてね」

「それで中に入って調べたんだな」

ユーリの問いに彼は首を横に振る。拒否られた上、魔導器が本当にあると思うなら正面から乗り込んでこい、と挑発を受けたらしい。

『で、自分たちに権限がないから乗り込まないってわけ？』

「でも、そりゃそいつの言う通りじゃねえの？」

「何だと!?!」

ソディアが取っ掛かろうとしたが、セアヴィラの痛い視線により彼女はその場に踏み止まった。

「ユーリ、どっちの味方なのさ」

「敵味方の問題じゃねえ。自信があんなら乗り込めよ」

「いや、これは畏だ。ラゴウは騎士団の失態を演出して評議会の権力強化を狙っている。今、下手に踏み込んでも、証拠は隠蔽され、しらを切られるだろう」

次の手もなさそうなフレンに対して、セアヴィラはあることを思いつく。

『なら、中で騒ぎでも起こそうか、僕が』

自分を指差して、へらり、と笑うセアヴィラをみんなは一斉に振り返る。騎士団は有事に際してのみ、有事特権により、あらゆる状況への介入を許されるのだ。

『な、何だよう…僕だって騎士団の一員なんだよ？確かに自由な地位はもらってるけど、自分が気に入くないことにはいくらでも手を貸すよ』

それにほら、僕なら顔は割れてないし、と自信有り気に言うセアヴィラ。したかなく今日何度目かの溜め息を吐いたフレンは、心配そうに彼女を見やる。

「セアラ、しつこいようだけど…」

『無茶するな、でしょ？分かってるって』

よし、と息込んだところでユーリに腕を掴まれた。振り向けば真っ直ぐに見つめる深いアメジストの瞳。真剣そのもののそれに、トクン、と胸が鳴り、頬を赤く染めるセアヴィラ。

『ユー、リ…？』

「勝手に一人で行こうとすんな」

『え、と……ついてきてくれる、ってこと？』

首を傾げて見れば、ユーリはそれ以上何も言わずに彼女の手を引いて部屋を出ていった。セアヴィラは翡翠の隻眼を閉じ、胸に手を当てて嬉しそうに微笑む。彼女はユーリの腕に飛び付いて溢れんばかりのハートを撒き散らした。

黒い雲が広がる港街

止めどなく渦巻く奇妙な感覚

- (だからくつつくな！)
- (やだ、照れないですよ)
- (照れてねえよ)
- (ユーリ大好き、VV)
- (知ってるっつーの)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8485y/>

星屑明星～テイルズオブヴェスペリア～

2011年12月11日16時56分発行